

**2005年度  
活動報告書**

**The Liberal Arts**

**慶應義塾大学教養研究センター**

Keio Research Center for the Liberal Arts

---

# 2005年度 活動報告書

---

慶應義塾大学教養研究センター  
Keio Research Center for the Liberal Arts

## はじめに

教養研究センター所長 横山千晶

2005 年は開所 5 年目を迎えた教養研究センターにとって大きな飛躍の年でもあり、設立当初の土台を見直す年でもありました。開所以来積み上げてきたコアとなる活動が広く慶應義塾の内外で認知されてきたと同時に、内外からの批評により、今までの活動の見直しと刷新を図る必要も出てきました。

動き続けながらも、常に自己批判の精神を忘れない。これはいままでの活動を見直し、新しい価値観と知のあり方を模索する上で必須の条件でありつつも、大変な困難を伴います。同時に評価に足る活動を可能にしてきたのは、教養研究センターを支える教職員および外部の協力者、そして学生たちの厳しくも温かい、そしてときに熱い支援です。

2005 年度の活動の中で、特に教養研究センターが重要視したのは、この内側への視線と外に向かって発信する提言の精神です。ここでは 2005 年度の活動を特徴づける 3 つの柱をご紹介します。

まず、教養研究センターが積極的に学生たちの活動を支援したことが挙げられます。2003 年度に教養研究センターの実験授業として立ち上がった「スタディ・スキルズ」は 2005 年度から「アカデミック・スキルズ」と名前を変え、クラスもいままでの週 2 クラスから 3 クラスに増えました。そこでともに「学ぶこととは」、そして「自分にとって学ぶべき事とは」を考える習慣を身につけた学生たちが主体となり、自主的にこの問いを仲間たちと教職員に投げかける試みが、ふたつの企画を中心に展開されました。ひとつは日韓学生 WEB 会議の開催。そしていまひとつが「学生フォーラム / 感動の大学を目指して ~ Yes, We Can Do! ~」企画です。いずれも学生たちが、慶應義塾という場を教職員と学生が協力して、新しい知と学びの中心として改善し、ほかの学生たちもその動きの中に積極的に参画する足がかりを作るという意志の下に企画・実現したものです。前者はソウル国立大学校の学生と、教養研究センター設置科目「スタディ・スキルズ」の修了者、および「アカデミック・スキルズ」の履修者とが協力して、企画・運営しました。これは、教養研究センターではじめてのテレビ会議です。後者では安西祐一郎塾長、西村太良教育担当常任理事、羽田功前教養研究センター所長をお迎えして、学生同士、学生と教職員とが共に慶應義塾のあり方について意見を交換しました。学びとは、教職員から学生への一方通行であってはいけない。学生同士の話し合いや切磋琢磨から見えてくるものがあるはず。これらの学生主体の企画は、いまひとつの知の伝播の可能性を提示してくれました。

次に挙げられるのは、教養研究センター発信の研究です。2003 年に開始した基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」は、2004 年度の成果をもとに、引き続き慶應におけるカリキュラムの調査を推し進め、問題点を検討しました。同研究の報告書として 2004 年度に出された『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて』は、日吉設置科目の現状分析および問題点を指摘した重要な提言として、現在学部のカリキュラム再考に役立てられています。

また、2005 年には、この「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」と並行して、基盤研究「身体知プロジェクト」が立ち上げられました。人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れません。同時にこれほど実在の身体性が希薄になっている時代もないでしょう。21 世紀に生きる私たちが再建もしくは発見すべき「身体」は何であり、それをひとつの「知」として次世代に伝えていくにはどのようにしたらよいかを教員・職員が一体となって考える場として 2005 年に発足したのが、この「身体知プロジェクト」です。ここでは既存の理論を批判し、新たな理論の可能性を実践によって確認することによって、慶應義塾発の「身体知」のあり方を確

立し提言していくことを目標にしています。2006年度は研究の一環として実験授業が立ち上がる予定です。この研究活動を基盤として、新しい教養と教育の姿が外へと発信されていくことでしょう。

最後に挙げたい活動は、国際的に活躍する有識者および研究者を招いてのさまざまな公開セミナーおよび講演会の開催です。日吉キャンパスを中心とした学生が幅広い「知」の体系を認識し、そのダイナミズムに触れる機会を提供するために開催されたこれらのセミナーや講演会には、多くの学生たちが参加し、直接講演者と対話することで、専門分野の研究の「いま」、そして「未来」を垣間見ることが可能となりました。この体験が、学生ひとりひとりの知の開拓への道標となっていくことはまちがいありません。なお、これらの公開セミナーおよび講演会の内容は、教養研究センターの「CLA アーカイブズ」シリーズとして随時刊行されていきます。

以上ご紹介したように、教養研究センターの活動はますますその幅と規模を広げています。しかし同時に考えなくてはならないことは、いま一度教養研究センターのあり方をその基本から考え直すことです。教養をめぐる研究と実践の場として、教養研究センターが手がけなくてはならない活動は多岐にわたります。しかし同時に、それぞれの時期にどの活動がもっとも重要とされるのか、その焦点をしっかりと見据え、ほかの部分に関しては積極的に内部や外部の他の組織と協力し合っていないと、かえって足元はぐらついてしまいます。開所5年目を迎えるに当たり、いままでの活動を振り返りつつ、活動の拠点をどこに絞っていくのかは、教養研究センターのアイデンティティを確立する上で大きな課題となります。同時に積極的な活動を展開しつつも、常にその活動を評価し、改善していくシステムを構築することが、これからの最重要事項となってくることでしょう。そのためにも皆さまの前向きな批判と協力を賜ることができますよう心からお願い申し上げます次第です。

# 目 次

. はじめに	03
. 2005 年度活動報告	
1. 教養研究センター運営委員会	06
2. コーディネート・オフィス	
研究企画ボード	08
調査・研究セクション	12
交流・連携セクション	14
広報・発信セクション	16
日吉行事企画委員会 (HAPP)	17
極東証券寄附講座運営委員会	19
日吉キャンパス公開講座運営委員会	21
3. 研究活動	
公開セミナー「ゲーテのファウストと脳内人工操作」	22
公開セミナー「敵か味方か　ロボットをめぐる文化」	24
基盤研究　カリキュラム研究	25
基盤研究　身体知プロジェクト	26
特定研究	29
一般研究	44
. 資料編	
1. 日吉キャンパス公開講座 受講者アンケート結果	51
2. 教養研究センター規程	52
3. 教養研究センター運営委員会委員	54
4. 教養研究センターコーディネート・オフィス	55
5. 教養研究センター所員・研究員	56
6. 2005 年度の主な活動記録	58
. 終わりに	59

# 教養研究センター運営委員会

2005年度の運営委員会は、10月14日(金)と3月16日(木)に来往舎において開催された。

## 第1回運営委員会

西村太良常任理事の挨拶に続いて議事に入り、横山所長より、「2004年度活動報告書」およびセンター・パンフレット(改版)の発行について報告がなされた。次いで、2005年度前期活動として、各セクション、各委員会から以下の通り報告がなされた。

昨年度と同様に日吉予算管理部門内調整費の配分を受け、「新しい教養授業の支援」事業の公募を行い、計15件、2200万円余の事業を採択した。「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点」を論題に第7回シンポジウムを開催した。2005年3月に開催した公開講座「ヨーロッパの大学改革と日本の大学」は、その内容を「CLAアーカイブズ1」に採録した。今後、講座、セミナー等の学術的な催し物は、「CLAアーカイブズ」により内容を公開してゆく。調査・研究セクションでは、FDワークショップ「ディスカッションをいかにファシリテートするか」を開催、「授業公開」の企画が進んでいる。交流・連携セクションでは、彫刻家・金沢健一氏展覧会、「一貫教育の冒険」等が予定されている。広報・発信セクションは、センター選書第2巻ほか、各種報告書やNewsletterを刊行し、ホームページによる広報活動にも力を注いでいる。HAPPは春学期に8件の企画を実施した。極東証券寄附講座、前期「生命の教養学」を終了。これと連結するセンター設置講座「アカデミック・スキルズ」は3コマを開講している。日吉キャンパス公開講座は、「創作とメディア」と題して開講中である。教養を考える場として、ソウル国立大学との間で日韓Web会議(テレビ会議)を9月に開催した。

続いて審議事項に入り、今年度開始となる基盤研究の教育カリキュラム研究および身体知プロジェクトについて、研究目的・内容、年次計画等が提示され、いずれも承認された。特定研究の学術フロンティア研究プロジェクトは「超表象デジタル研究 表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築(研究拠点:教養研究センター)として継続申請が採択されたことを受け、過去の研究成果を出発点に、研究の重点領域と課題を絞り、より深化したメタ理論研究と枠組みのデザイン、およびモデルの実験・実践のための拠点形成を目標に、研究組織を統合研究ボード、コンテンツ研究ユニット、学習環境構築研究ユニット、超表象デジタル化研究ユニットに分

けて研究を進めるとの説明があり、承認された。また、所員・兼任研究員追加登録(案)についても承認がなされた。

懇談事項では、横山所長より、施行後3年を経た「慶應義塾大学教養研究センター規程」について、見直し等意見があれば連絡をいただきたいとの発言があった。

最後に、西村常任理事から、文部科学省「特色GP」に採択された日吉・自然科学系教室との間で、より一層の連携強化と協力を求める旨の発言があり、閉会となった。

## 議題

### 報告事項

1. 2004年度活動報告書およびセンター・パンフレット(改版)の発行

2. 2005年度前期活動報告

### 審議事項

1. 基盤研究について

1) 教育カリキュラム研究

2) 身体知プロジェクト

2. 特定研究について

学術フロンティア研究プロジェクトの継続

3. 人事について

所員・兼任研究員の追加登録

4. その他

### 懇談事項

1. 「慶應義塾大学教養研究センター規程」の見直しについて

2. その他

### 配布資料

2004年度活動報告書

「センター・パンフレット」改訂日本語版

予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」

「教養研究センター選書」応募要領(2005年度)

「ヨーロッパの大学改革と日本の大学」(CLAアーカイブズ1)

科研費取得勉強会・FDワークショップ第3回

交流・連携セクション企画

「Newsletter No. 6」

2005年度日吉行事企画委員会(HAPP)行事企画

極東証券寄附講座「生命の教養学」(05年度春学期)

2005年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座

2005年度教養研究センター所員・兼任研究員追加

登録(案)

慶應義塾大学教養研究センター規程

## 第2回運営委員会

議事に先立ち西村常任理事の挨拶があった。引き続き議事に入り、2005年度後期活動について以下の通り報告がなされた。

「日本におけるドイツ年 2005/2006」にちなみ、11月に講演会「ゲーテの『ファウスト』と脳内人工操作（国際センターと共催）および公開セミナー「敵か見方か ロボットをめぐる文化」を開催した。「新しい教養授業の支援」事業に採択された計16件の成果報告会を12月に開催した。海外研究機関調査の一環として、2006年1月に韓国の延世大学と成均館大学、ソウル国立大学、3月にオーストラリアのシドニー大学とサウス・ウェールズ大学を訪問し、国内では立教大学を訪問した。FDワークショップは、講座「構造的教授法 テーマ発見と書く能力」を開催した。「公開授業」は26名の教員による43コマの授業が公開対象となった。彫刻家・金沢健一氏の展覧会、パフォーマンス、ワークショップを11月に開催した。12月に開催された Hiyoshi Research Portfolio 2005（日吉キャンパス研究成果報告会）にセンターとして展示参加したほか、新しい教養教育を考えるシンポジウム、および学生・地域の商店街・行政機関によるシンポジウム「開かれゆくキャンパス4：21世紀の商店街」を主催した。「アカデミック・スキルズ」を履修した学生の団体が中心となり、「開かれゆくキャンパス3：学生フォーラム/感動の大学を目指して～Yes, We Can Do!」を12月に開催した。教員側からは羽田功教授の基調講演のほか、コメンテーターとして安西祐一郎塾長、西村常任理事が参加した。義塾の一貫教育校生および大学生が協働する群読会「開かれゆくキャンパス5・一貫教育の冒険1 平家物語群読会」が、2006年1月に幼稚舎自尊館で開かれた。「港北ふるさとサポート事業」として、地域ボランティア団体との協力・交流を図る横浜市港北区の企画に協賛した。「CLAアーカイブズ」は1～2は既刊、3～6も近く刊行予定である。センター・パンフレット（英語版）を新たに作成し、「Newsletter No. 7」を2006年1月に発行するなど、活発な広報・発信活動が続いている。

「センター選書」に『ドラキュラ』からブンガク 血のみならず、口のすべて』を採択した。HAPPは秋の企画5件を実施した。極東証券寄附講座は、センター設置授業「アカデミック・スキルズ」の「プレゼンテーション・コンペティション（第2回）」を開催した。

基盤研究のカリキュラム研究は、勉強会を定期的に

開催し、大学評価、国立大学改革、慶應の外国語教育、慶應の国際連携プログラム、能力別クラス編成等の問題について、論点を整理している。身体知プロジェクトは、来年度秋学期実験授業開始を視野に入れて活動を進めている。

次に審議事項に入り、田上竜也君（商学部助教授）の留学に伴い後任の副所長に佐藤望君（商学部助教授）が選出された。任期は残任期間（2006年4月～9月）となる。センター規程第4条第6項に定める研究員として、特別研究教員（有期）、兼任研究員に加え、新たに研究員（有期）を置くことが承認された。その後の手続きを経てこの規程改正は、5月9日付施行として正式決定された。最後に、2006年度活動計画（案）および予算（案）が承認された。

## 議題

### 報告事項

#### 1. 2005年度後期活動報告

### 審議事項

#### 1. 人事について

- 1) 副所長の交替
- 2) 所員および兼任研究員

#### 2. センター規程の一部改正

#### 3. 2006年度活動計画（案）および予算（案）

#### 4. その他

### 配布資料

#### 2005年度活動報告

#### 平成17年度予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」成果発表会プログラム

#### 各種パンフレット

#### 2005年度基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」講演記録集1（「CLAアーカイブズ2」）

#### 「CLAアーカイブズ3・4・5・6（表紙）」

#### 2005年度日吉行事企画委員会（HAPP）行事企画

#### 「超表象デジタル研究」プロジェクト紹介

#### 教養研究センター所員・兼任研究員追加登録（案）

#### センター規程改正（案）条文新旧対照表

#### 2006年度活動計画（案）

#### 2006年度予算（案）

慶應義塾大学教養研究センターの運営業務はコーディネート・オフィスが担っているが、研究企画ボードは、その中核をなし、教養研究センターの活動全般についての検討を行う。以下に研究企画ボードの役割と2005年度に研究企画ボードが中心となって企画・運営を行った事業について報告する。

#### 1. 研究企画ボードと各セクションならびに各委員会との関係について

教養研究センターにはセンター運営の実務業務を担うコーディネート・オフィスが置かれているが、そのメンバーはセンター所員および職員の中から委嘱されたコーディネーターによって構成されている。また、コーディネート・オフィスには研究企画ボードを中心として調査・研究セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクションが設置されている。さらに日吉行事企画委員会(HAPP: Hiyoshi Art and Performance Project)、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会が研究企画ボードとの密接な連携の下に活動を展開している。

中核となる研究企画ボードは、センター所長、3名の副所長、センター事務長、センター所員・職員の中から委嘱された15名のコーディネーターの計20名で構成されている。その役割は、調査・研究活動の企画・運営・支援および統括、研究資金などの導入、内外諸機関との交流・連携の促進、その他センターが主体的に進めるさまざまな事業の母体としての機能を果たすことにある。同時に上記の各セクション、各委員会との連携を保ちつつ、センター全体の運営のバランスを図る調整機能も併せ持っている。

各セクションの責任者には、3名の副所長がそれぞれ当たり、研究企画ボードと連絡を取りつつ活動を展開している。調査・研究セクションではセンターの調査・研究活動の円滑な進展を支えるための活動とともに、研究・教育の基盤となるFDを中心とした教員サポート活動を担当している。交流・連携セクションでは義塾内外に向けた行事の企画・運営、内外機関との交流・連携促進のための活動を担っている。広報・発信セクションはセンターの活動報告書、シンポジウムや公開セミナーなどの報告書、「ニューズレター」、「センター・レポート」などの編集・発行、センター刊行物の企画・発行、HPの作成と管理を行っている。詳細は各セクションからの報告を、またHAPP、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の

活動についても下記の記述とともに、各委員会からの報告を参照されたい。

#### 2. 2005年度の主な事業

##### 1) 教養研究センター主催シンポジウムの開催

###### ・第7回シンポジウム「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて」

2005年7月16日(土)に開催された。当日は2004年度に活動した教養研究センター基盤研究「教育カリキュラム研究」グループの幹事による発表を中心に、同研究の報告書『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて』をたたき台として、日吉設置学部共通総合教育科目の現状分析、および問題点が論じられた。幹事の発表のあとに、前教育担当常任理事、教育担当常任理事、および日吉主任代表のコメントを受けて、参加者との活発な意見交換がなされた。

このシンポジウムの内容を含め、計7回にわたるシンポジウムの報告書はすべて教養研究センターのホームページ(<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>)から、PDF形式のファイルとしてダウンロードすることができる。

##### 2) 教養研究センター公開セミナーの開催

2005年度は、国際的に活躍する有識者、および研究者を招いて、日吉キャンパスを中心とした学生が幅広い「知」の体系を認識し、そのダイナミズムに触れる機会を提供するための、公開セミナーおよび講演会を随時開催した。なお、これらのセミナーおよび講演会の内容は、「CLA アーカイブズ」シリーズとして随時刊行される。2005年度に開催された公開セミナーは以下のものである。

###### ・教養研究センター公開セミナー「敵か味方が ロボットをめぐる文化」

2005年11月11日(金)に開催された。ケルン大学教授ハンス・エッセルボルン氏をお迎えし「ロボットとコンピューターは敵になるか? アシモフのロボット作品からドイツSF文学まで」と題した氏の講演に引き続き、コメンテーターの巽孝之君(文学部教授)および前野隆司君(理工学部助教授)を含めたディスカッションが展開された。学生も数多く参加し、文学および科学技術をめぐる活発な質疑応答が交わされた。

##### 3) 教養研究センター各セクションとの連携

教養研究センター主催の各行事や活動は、研究企画

ボード以外に、各セッション(調査・研究セッション、交流・連携セッション、広報・発信セッション)がそれぞれ責任母体となって、企画ボードとの連携のもとに開催されている。以下の活動については、当該セッションの報告を参照されたい。

- ・「科学研究費補助金取得のための勉強会(2005年10月3日開催) 調査・研究セッション
- ・第2回「来往舎現代芸術展 金沢健一・響きの庭目で聴く音、耳で見る形(2005年11月4日から16日まで) 交流・連携セッション
- ・シリーズ「開かれゆくキャンパス(第3回「学生フォーラム/感動の大学を目指して～Yes, We Can Do!～」2005年12月17日開催)第4回「21世紀の商店街」2005年12月20日開催)第5回「慶應義塾一貫教育の冒険1『平家物語』群読会」2006年1月29日開催) 交流・連携セッション
- ・他大学・他機関への調査 調査・研究セッション  
立教大学訪問(2005年12月2日)  
韓国教育研究機関訪問(2006年1月2～5日)  
オーストラリア シドニー大学およびニュー・サウス・ウェールズ大学訪問(2006年2月28日～3月3日)

#### 4) 講演会および写真展の共催

塾内の他組織および研究センターとの共催で以下の行事が開催された。

- ・教養研究センター・国際センター共催講演会  
マンフレート・オステン氏(前アレクサンダー・フォン・フンボルト財団事務総長)講演「ゲーテの『ファウスト』と脳内人工操作 21世紀における新人類『ホムンクルス』」  
本講演会は慶應義塾における、2005-2006年「慶應義塾におけるドイツ年」の記念行事の一環として行われたものである。
- ・国際センター・外国語教育研究センター・教養研究センター共催写真展「ロシアの多様性 自然・文化・民族」  
本写真展はノーボスチ通信社の協力のもとで、開催されたものである。

#### 5) 基盤研究の活動と成果報告

2005年度の基盤研究は、教養研究センターの基幹となる研究組織として、以下の二つの研究プログラムを展開した。「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」

と「身体知プロジェクト」である。前者は、各学部に所属する所員間の報告と意見交換を通して、慶應義塾におけるカリキュラムの現状を把握するとともに、さまざまなカリキュラムモデルを考慮に入れつつ、慶應義塾のあるべき教育システムを構築し、提言していくことを目標としている。2005年度は2004年度の成果をもとに、慶應におけるカリキュラムの調査を進め、問題点を検討することと並行して、他組織・他大学において教育および教育研究に携わる講師を招いて、数回にわたる勉強会を開催した。後者の「身体知プロジェクト」は、「身体」を切り口に、新しい教養のあり方を模索し、実験授業を通して理論とその実証を行うことを目的に据えて2005年5月に発足したものである。それぞれの活動についての詳細は、本報告書の「研究活動」の章の該当箇所を参照されたい。

#### 6) 教養研究センター設置科目「生命の教養学(春学期)」「アカデミック・スキルズ(春学期)」「アカデミック・スキルズ(秋学期)の開講

2005年度は、教養研究センター設置科目として、極東証券寄附講座「生命の教養学」、同寄附講座「アカデミック・スキルズ」の2種類の科目を開講した。前者は「生命の教養学」のシリーズとして、「生命と自己 今、自分」が、「生きている」とは?」の副題のもとに、さまざまな分野の講師陣を招いてのオムニバス講座として設置されたものである。後者の「アカデミック・スキルズ」は、教養研究センターの特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクト、「リベラル・アーツ教育の総合モデル構築」との連携のもとで、2003年度に実験授業として開講した「スタディ・スキルズ」を前身としている。2004年度に「アカデミック・スキルズ」と改名、同時に文学部・法学部・商学部・看護医療学部で正規科目として単位化が図られることとなったものである。2004年度の履修希望者の数を踏まえ、2005年度はひとつクラスを増設し、3コマを設置した。また、2005年度からは、経済学部でも単位化が認められることになった。なお、これらの設置科目は「極東証券寄附講座運営委員会」によって企画・運営されている。詳細は同運営委員会の報告を参照されたい。

#### 7) 日韓学生WEB会議の開催

2005年の特色のひとつとして、教養研究センターの活動に積極的に学生が関わったことが挙げられる。こ

これは2004年度に教養研究センターのコーディネーター数名がソウル国立大学校の教員たちと意見交換をした際に話題に上った、学生の意見をどのように大学のカリキュラムに反映させていくのかについての議論がもとになっている(2004年度の活動報告書、10～11ページを参照のこと)。その結果が2005年9月22日に開催された日韓学生WEB会議、「For the Improvement of the Teaching and Learning at University: A Discussion Meeting of the Korean and Japanese Students」である。この会議はソウル国立大学校のCenter for Teaching and Learningの募集した同大学の学生と、教養研究センター設置科目「スタディ・スキルズ」の修了者、および「アカデミック・スキルズ」の履修者の学生とが協力して、企画・運営したものである。今回のWEB会議では、大学での教育のあり方、そのためのインフラのあり方をめぐって、ソウル国立大学校から3名のスピーカー、慶應義塾大学から4名のスピーカーが意見を述べ、続いて質疑応答とディスカッションを行う形式をとり、3時間におよぶ意見交換がなされた。

#### 8) 予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」

教養研究センターは日吉予算管理部門内調整費合同調整委員会から委託され、2004年度に引き続き2005年度に「新しい教養授業の支援」事業を行った。具体的には日吉キャンパスとして新しい教養教育の授業開発・実施およびこれにかかわる作業・成果の発信あるいは既存の授業の改善などを目的とする事業を公募し、効果の期待できる事業に対して資金支援を行ったものである。公募は2回に分けて行われ、1次は総応募数15件に対し、採択13件、2次では応募13件に対し、3件が採択された。なお、採択事業全16件に関しては、2005年12月3日(土)に事業の成果報告会を行った。

#### 9) 慶應義塾大学教養研究センター選書の刊行

2004年度に引き続き、教養研究センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信すると同時に、研究・教育相互の活性化を目指すことを目的として、「慶應義塾大学教養研究センター選書(Mundus Scientiae)」3号の原稿公募が行われた。今回は選定の結果、武藤浩史君(法学部教授)著「ドラキュラ」からブンガク 血、のみならず、口のすべて」が刊行された。

#### 10) 新入生歓迎行事・極東証券寄附講座・慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座の実施

HAPP(日吉行事企画委員会)、極東証券寄附講座運営委員会、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員会の各委員会との連携のもとで、一連の新入生歓迎行事および公募企画行事、極東証券寄附講座「生命の教養学 生命と自己」および「アカデミック・スキルズ」、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座「創作とメディア」の企画および運営に参画した。

#### 11) 一般研究プロジェクトの選定

一般研究(共同研究)とは、センターの目的に沿った内容の共同研究で、外部資金などを獲得してすでに一定の業績をあげている、あるいは将来、独創的な成果が期待できるプロジェクトのことである。2005年度は教養研究センターの所員に対して公募され、選定された以下の一般研究プロジェクトが調査・研究を続けた。なお、公募は単年度ごとで2回まで継続申請ができる。

(カッコ内は研究代表者と慶應義塾における所属)

- ・「フレーム意味論によるオンライン日本語語彙情報資源の構築(初年度)〔鈴木亮子・経〕
- ・「解析的整数論の諸相(初年度)〔桂田昌紀・経〕
- ・「近代日本の健康転換(初年度)〔鈴木晃仁・経〕
- ・「細胞行動データベースを利用したオントロジー構築ならびに動画作成(初年度)〔根岸寿美子・商〕
- ・「GISを用いた自然環境および土地利用変遷の解析(2年目)〔松原彰子・経〕
- ・「比喩的思考と比喩的言語の認知意味論:コーパスの作成と分析(2年目)〔辻幸夫・法〕
- ・「女性学開発プロジェクト2005(2年目)〔宮下理恵子・法〕

#### 12) 国際会議への参加

海外での教育とカリキュラム研究の動向を知ると同時に、教養研究センターで展開されているさまざまな試みについて紹介し、批評を受けるために2005年度は以下の国際会議に参加した。

・2005年4月14日～15日 国際シンポジウム  
“Liberal Arts Education in China, Japan, and Korea: Challenges and Prospects”(ソウル国立大学校)

本国際シンポジウムは、大学における liberal arts education の意義とカリキュラム構築をめぐるものであり、韓国、アメリカ、中国、および日本からのスピーカー

が発表を行い、コメンテーターによるコメントのあと、フロアとの意見交換がなされた。教養研究センターはこのシンポジウムでの講演依頼を受け、横山千晶(教養研究センター所長)および近藤明彦(教養研究センター副所長)が参加し、以下のテーマで2005年4月14日に発表を行った。

Akihiko Kondo, “Re-envisioning Education: Keio University’s Approaches to the Problems of Japanese Liberal Arts at University Level”

Chiaki Yokoyama, “Critical Thinkers: Enhancing Japanese Students’ Experience of Lectures through Small-Group Seminars”

近藤の発表は日本における大学の教養教育のあり方を歴史的に紐解き、その中で挙げられる問題点を指摘し、慶應義塾大学における取り組みを紹介したものである。横山の発表は2003年度からカリキュラム研究の一貫として教養研究センターが設置している実験授業「アカデミック・スキルズ(旧スタディ・スキルズ)」の取り組みを紹介したものである。双方とも、参加者が共有する問題意識を刺激し、活発な意見交換へとつながった。

・2005年7月11日～15日 第18回国際会議 “The First Year Experience” (サウサンプトン大学・イギリス)

本国際会議は大学における導入教育・接続教育をめぐる国際会議としては最大規模のものである。教養研究センターがこれから取り組まなくてはならない課題として、一貫校との連携、1・2年次の導入教育、基盤カリキュラムと専門教科との関係、社会との対話などが挙げられるが、それらの課題に対して海外の教育機関がどのような取り組みを行っているのかを知るために、会議およびワークショップに参加したものである。すべてのセッション、および研究発表は参加者との緊密な意見交換の場として機能しており、海外での状況を知ると同時に日本の高等教育のあり方について紹介できるよい機会ともなった。参加者は横山千晶(教養研究センター所長)および岩波敦子(教養研究センター副所長)の2名である。

### 13) 研究企画ボード会議の開催

2005年度は原則として2週に1回の割合で定例会議を開催した。そのほか、必要に応じて臨時会議やメーリング・リストによる意見交換を適宜行った。

(横山千晶)

2005年度の調査研究セクションの活動は以下のよう  
なものであった。

#### 1. 科研費勉強会

本年度の科研費取得のための勉強会は2005年10月3日に開催された。この勉強会は例年、科研費の公募時期に合わせて行われているものである。本年度は講師に青木健一郎(経済学部教授)、納富信留(文学部助教授)、村松憲(体育研究所専任講師)を迎え、近藤明彦(体育研究所教授・教養研究センター副所長)の司会のもとに、それぞれの申請の詳細をお話しいただいた。

報告では申請書執筆にあたっての心構え、申請結果に対する考え方、「萌芽研究」と「基盤研究」の特徴などが説明された。これに対して、申請金額に対する見積りもりの必要性、学会発表をはじめとする研究成果公開の方法などについて質疑応答があった。最後に村上(研究支援センター)と石川(同)から、(a)2006年度の変更点と、(b)計画調書作成にあたっての留意点が指摘され、勉強会は盛況のうちに幕を閉じた。参加者は23名であった。

(鈴村直樹)

#### 2. 公開授業

2005年度秋から調査・研究セクションでは「公開授業」というプロジェクトを開始した。相互に授業を公開することで、なるべく多くの教員に授業の工夫や努力への関心を高めてもらうことが目的である。昨年度はプロジェクトの趣意書を配り協力を要請したところ、26名の教員からご賛同いただき、43コマの授業が公開された。公開の方式は年間を通していつでも公開、指定した曜日・時限のみ公開する(年1回でも可)、録画した授業を公開する、という3形態で、趣意書と同時に配布した回答票に記入してもらった。回答はとがほとんどで、はなかった。参加者に授業に関する感想などを自由に書いてもらうための用紙(コメントシート)も準備した。参加者は事前に教養研究センターでシートをもらい、公開授業のあとで担当教師がそれを回収するという方式を取った。

(八嶋由香利)

#### 3. FD ワークショップ 3 ディスカッションをいかにファシリテートするか 教授法の学習方法としてのSGD(Systematic group discussion)の可能性

FD ワークショップの3回目は、2005年10月11日、「ディスカッションをいかにファシリテートするか」というタイトルで、大妻女子大学人間関係学部の西河正行先生を迎え、体系的グループ討論法について実践を交えながらご紹介いただいた。FDの考え方や講義形態の多様化に伴い、授業において少人数グループでのディスカッションが取り入れられることも増えてきている。しかし教師がそれをうまくコーディネートするハウツーを持たないゆえに、十分な結果を得られないというケースも少なくないと思われる。一方、臨床心理の場面では、言葉で語ることの治療効果に基づいて学生集団にディスカッションをさせるという方法が工夫され、経験の積み重ねがある。そこで、今回は日吉の学生相談室でカウンセラーをしていらっしゃる臨床心理士の西河先生に、臨床場面で培われた討論授業構築のノウハウをご紹介いただくとした企画である。参加者は7名で、企画側としては少ないと思われる数であったかもしれないが、SGDの実践を試みるのには程よく、予定時間を超えて盛り上がり、参加者は充実感をいただきながら解散できた。

(中島陽子)

#### 4. FD セミナー 6「構造的教授法」テーマ発見と書く能力 ドイツ・ケルン大学ライティングセンターの挑戦

FD セミナー 6では商学部石原あえか助教授をコーディネーターとして、講師としてドイツ、ケルン大学ライティングセンター所長のヘルガ・エッセルポルン博士を招き、ライティングスキルに関するセミナーを2005年11月10日に開催した。これは教養研究センターが設置するアカデミック・スキルズ(2004年度はスタディ・スキルズ)をはじめとして各学部においても少人数セミナー形式の授業が多く展開されるようになっているが、これらの少人数セミナーでは多くの場合そのレポートの提出やプレゼンテーションが課題となる。しかし、テーマ発見から最終的なレポート・論文の作成に至るまでのプロセスを学生が正しく理解して学習を進めることの難しさは、日本のみならず各国の大学においても問題となっている。欧米の大学や昨年度教養研究センターが調査訪問した韓国のソウル大学では、この問題に対応するためにライティング・ラボの設置等が行われている。エッセルポルン博士はテーマ発見における問題の解決法からレポートを書く際の資料の選択法、論文の骨子の作成法にはじまり、教える教師側がどのように学

生の問題に対処していけば良いかについて構造的・論理的な展開で説明をされた。今回のセミナーの内容は、FD レポートの形ではなく「CLA アーカイブス4」としてより詳しい内容が分かる形でまとめられた。

(近藤明彦)

#### 5. 国内大学調査(立教大学)

立教大学では教養教育に関して全学共通カリキュラムという取り組みを行っている。また、立教大学の建学の精神などを伝える「立教科目」は特色 GP として採択されている。そこで今回、教養研究センターの中島陽子先生、白崎容子先生、根岸宗一郎の3名で立教大学を訪問し(2005年12月2日)、立教大学全学共通カリキュラム運営センター部長、理学部(物理学)山本博聖教授と全学共通カリキュラム運営センター事務局課長藤原芳行氏にお話を伺った。全学共通カリキュラムの基本コンセプトは、グローバルな課題と社会の要請にあった教養教育をすることで、課題を発見・解決する能力を身につけた人材を育成しようというものである。「立教科目」など新しい科目も用意して教養教育の充実に努力しているなど、興味深いお話を伺うことができた。この場を借りて調査にご協力頂いた立教大学全学共通カリキュラム運営センターの方々に厚く御礼申し上げたい。

(根岸宗一郎)

#### 6. 韓国調査(延世大学、成均館大学、ソウル国立大学)

調査研究セクションでは2006年1月2日から5日まで韓国における大学調査を行った。対象は延世大学(1/3)、成均館大学(1/4)ならびにソウル国立大学(1/4)で、主たる内容は以下の通りである。

##### (1) 延世大学

学部大学前学部長 K. C. Min 教授、現学部長 Kim, Yong-Hak 教授に面会し、学部大学(University College)の設立目的と組織、入試制度、学生の意識変化、フレッシュマン・セミナー、履修と成績、アカデミック・アドヴァイザーのあり方などについて懇談した。単に組織論にとどまらず、いかにして教養教育の質の向上を図るか、また基礎教育の重要性と高等教育をどう有機的に関連させるかなどについて踏み込んだ議論がなされた。

##### (2) 成均館大学

学部大学の Son, Dong-Hyun 教授と面会し、学部大学設立後の様子、具体的な成果、カリキュラム形態、専

門教育との連携、人事面でどのような人物が求められるか、などについて懇談した。とりわけ、学部大学に対する専門教育の教員の協力、外国語カリキュラムの現状、ティーチング・サポートの機能、教員に対する学生側および大学当局からの授業・業績査定、あるいは成均館大学特有の儒学思想と大学カリキュラムの関係などをインタビューできたのは有意義であった。

##### (3) ソウル国立大学

Lee, Hye-Jung、Lee, Hee-Won、Min, Hye-Ri、Kim, Jun-Sung の各専任研究員と面会し、CTL の最近の活動報告、スタッフ数、前回ウェブ会議の反省点などを議論した。このうち CTL の活動に関しては、おもにワークショップ・E-learning・Writing の現状を見聞した。他方、ウェブ会議に関しては、次回の開催に向けて、(a) 詳細は電子メールで連絡を取り合うこと、(b) パワーポイントの資料と原稿を開催日の1週間前を目途に交換しあうこと、(c) 日程を2006年11月3日を軸に調整することなどが合意された。

なお、蛇足ながら今回ほど「通訳の力」を実感したことはない。同行した通訳が優秀であったことにもよるが、そもそも韓国語でインタビューしたことの意義は大きい。海外調査は一方で予算をはじめとする諸条件に制約され、また他方でアカデミックな会合は英語で行えばよいという考えもある。しかし、こうした発想は必ずしも正しくない。現地の言葉で話すことにより得られる情報量がいかに多いかを再認識する必要があると思われた。

(鈴木直樹)

#### 7. オーストラリア調査(University of Sydney、University of New South Wales の視察報告)

訪問した2006年3月1～4日は豪州の新学期であるため、キャンパスは活気にあふれていた。両大学ともに、自然科学教育と外国語教育を中心に教育全般についてそれぞれの専任教員より説明をいただき意見交換した。

豪州の大学では、通常、専門教育科目以外に必修科目はない。これはアメリカ式よりイギリス式の大学制度に近いと思われる。通常の bachelor(学士)の学位を得るのに必要な期間は3年である。これは教養科目/総合教育科目、外国語科目の履修の必要がないため可能であるとの指摘があった。ただし、UNSW は豪州の大学としては多少特殊であり、GE (General Education) requirement として、4つの School より4つ

の科目を履修しなければならないという卒業の条件がある。

大学はいくつかの School に分かれており(学部に対応)その細分として Department がある。単一の学士号以外に、以下などのいくつかの複合的な学位がある。

・ Double Major : 同じ School で 2 つの学士号の条件を満たすことによって得られる。密接に関連のある分野での学位である(たとえば Physics と Chemistry など)

・ Double Degrees/Combined Degrees : 異なる School で 2 つの学士号を得る。一般に学問体系としてかなり離れている分野でとる(たとえば Law と Physics など)

また、両大学ともに Peer mentoring のシステムがあり、学生(3、4年生)が新入生のさまざまな相談に乗る。大学に入学しているいる悩みがあるが、カウンセラーや教員に相談するほどのものではないと学生が判断したり、敷居が高いと感じたなどの場合に利用する。mentor は報酬の無いボランティアでありながら積極的に参加して機能している。学生がその経験を就職の際に利用することが奨励されていることも一つの理由である。

(中島陽子・井上逸兵)

#### 1. 2005 年度の活動目標

従来の活動を踏まえつつ、2005 年度の交流・連携セクションは、次の 3 点を活動の柱とした。(活動の詳細については次項参照)

「来往舎ギャラリーを有効利用したキャンパス内外の交流・連携」

「日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携」

「大学と一貫教育校との交流・連携」

#### 2. 2005 年度の活動成果

来往舎ギャラリーを有効利用したキャンパス内外の交流・連携:「金沢健一 響きの庭 目で聴く音、耳で見る形」

大学と学生、地域住民を結ぶ新たな交流・連携の試みとして、理工学部近藤幸夫助教授とゼミナール学生が中心となり、現代美術家金沢健一氏の展覧会「金沢健一 響きの庭 目で聴く音、耳で見る形」を、2005 年 11 月 4 日(金)から 16 日(水)にかけ来往舎ギャラリーにおいて開催した。金沢氏の代表作『音のかけら』(さまざまな形に鉄板を溶断し、それを来場者が触れたり叩いたりすることによって形と音の関係を体感する展示)などの作品をイベントスペースやギャラリー内に展示し、さらに期間中、氏によるパフォーマンスやワークショップも行われた。休み時間には一般学生が立ち寄って作品に触れたり、ワークショップには特に地域住民の方々が多く参加するなど、オープンスペース利用の可能性を広げた企画といえる。

日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携:「開かれゆくキャンパス4 : 21 世紀の商店街シンポジウム」

大学による地域の活性化や街づくりへの貢献策を検討する試みとして、2005 年 12 月 20 日(火)16 時半より日吉キャンパス来往舎 1 階シンポジウムスペースにて「開かれゆくキャンパス4 : 21 世紀の商店街シンポジウム」が開催された。シンポジウムは前半の学生発表と後半のパネルディスカッションの 2 部構成で行われ、大学が行政関係者や商店街の方々と真摯に意見を交換する機会となった。また横浜市港北区の地域支援事業「港北ふるさとサポート」を教養研究センターが後援し、理工学部熊倉敬聡教授が担当者として参加した。さらに教養研究センターの直接の活動ではないが、実施 3 年目となる「HIYOSHI AGE 2005」が行われ、雨天にもかかわらず多くの観客を集めた。

大学と一貫教育校との交流・連携：「開かれゆくキャンパス5：慶應義塾一貫教育の冒険1」

2006年1月29日(日)に、幼稚舎自尊館において一貫教育校の児童・生徒と大学生による『平家物語』朗読発表会が行われた。理工学部熊倉敬聡教授を担当コーディネーターとし、一貫教育校の先生方(幼稚舎・鈴木秀樹先生、普通部・鈴木淑博先生、志木高等学校・速水淳子先生、女子高等学校・喜多村隆先生)の献身的な協力をいただきつつ、上記4校の生徒に演出の大学生を含め約100名の塾生が参加する企画となった。幾度にもわたる稽古、リハーサルに、塾生たちは熱意を持って取り組み、理事や多くの父兄が来場した本番では、見事な舞台に大きな拍手が沸いた。朗読会終了後の感想交換会では、年齢差、性差をお互い実感しながら共有する経験の貴重さを味わったという意見がいくつも述べられ、早くも第2回を期待する声も上がっていた。

### 3. 今後の課題

2006年度の目標としては、

「来往舎ギャラリーを有効利用したキャンパス内外の交流・連携」として、東京芸術大学との協働による展示「SWITCH展」を企画・実施する。日常性や地域性に立脚した現代美術のあり方について、学生や地

域住民が理解を深め、さらに制作過程にも入っていくという体験型・参加型の現代美術展である。

「日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携」を商学部設置総合教育セミナー「21世紀の商店街」の授業を通じ、さらに深めていく。年度末にはシンポジウムを開催する予定である。

「大学と一貫教育校との交流・連携」については、「慶應義塾一貫教育の冒険2」として『学問のすすめ』をテキストにした群読会を企画している(詳細未定)

(田上竜也)



一貫教育校の児童・生徒たちによる『平家物語』の郡読



「21世紀の商店街シンポジウム」パネルディスカッション

広報・発信セクションは、教養研究センターの活動やその研究成果、教養・教養教育に関する提言等を、さまざまな媒体を通じて、学内・外に広報・発信している。2005年度の主な活動は以下の通りである。

1. センター・パンフレットの改定

a. 日本語パンフレットの作成

横山所長、岩波、近藤、田上各副所長、広報・発信セクションの佐藤所員が中心となって、センター・パンフレットの編集・作成にあたった。A4版16ページで、制作は慶應義塾大学出版会である。

b. 英文パンフレットの作成

横山所長、岩波副所長、広報・発信セクションの柏崎所員、レイサイド所員が中心となって、英文パンフレットの編集・作成にあたった。これはセンター初の試みである。A4版8ページで、制作は慶應義塾大学出版会である。

2. 2004年度活動報告書の刊行

2004年度教養研究センターの活動に関する報告書をまとめ、2004年8月31日付けで発行した。報告書は運営委員会 コーディネート・オフィス 研究活動、そして資料として、センター規程のほか、運営委員会委員、コーディネート・オフィスメンバー、センター所員・研究員一覧も収録した。セクション責任者の岩波、事務局の高橋が中心となり、広報・発信セクションのメンバー、横山由広所員が編集・校正を担当した。A4版60ページで、制作は慶應義塾大学出版会である。

3. センター・ニュースレター 第6号の発刊

田上竜也副所長の「教養教育と『他者』」を巻頭言とし、学術フロンティア、2004年度基盤研究最終報告、2005年度より新たに始まった二つの基盤研究、HAPP、教養研究センター設置講座「スタディ・スキルズ」の名称変更について、シンポジウム「21世紀の商店街」、運営委員会、刊行物案内、2005年度日吉予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」採択事業(第1次)の採択結果、2件のインフォメーション、そして事務局便りによって構成されている。広報・発信セクションの岩波敦子副所長、事務局の高橋が編集・校正作業を担当した。A4版8ページで、制作は慶應義塾大学出版会、発行日は2005年7月15日である。

4. センター・シンポジウム 7「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて」の刊行

第7回教養研究センターシンポジウムは、「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて」というタイトルで、2005年7月16日(土)、来往舎一階シンポジウムスペースにて開催された。司会は田上竜也副所長(商学部助教授)が務めた。基調報告はすべて本塾教員である、納富信留文学部助教授、佐藤望商学部助教授、種村和史商学部助教授、そしてコメントは黒田昌裕前常任理事(現内閣府経済社会総合研究所長)、西村太良現担当常任理事、朝吹亮二日吉主任代表によって行われた。このシンポジウムの記録である本冊子は、報告者および参加者の全発言を収録し、2005年10月28日に発行された。広報・発信セクションのメンバーであり当日報告者である佐藤望所員と岩波副所長が編集・校正作業を担当した。A4版32ページで、テープおこしも含めた制作は慶應義塾大学出版会である。

5. センター・ニュースレター 第7号の発刊

岩波敦子副所長の「『教養』のグローバル・スタンダード」を巻頭言として、2005年度より始まった二つの基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」と「身体知プロジェクト」の活動報告、継続研究として新たに始動した学術フロンティア「超表象デジタル研究」のほか、極東証券寄附講座、第7回シンポジウム「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて」、慶應義塾におけるドイツ年記念の二つの公開セミナー、「FDを考える6」、HAPP、開かれゆくキャンパス3「学生フォーラム」、開かれゆくキャンパス4「21世紀の商店街」、2005年度日吉予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」採択事業(第2次)の採択結果、日吉キャンパス公開講座、運営委員会に関する報告、2件のインフォメーション、そして事務局だよりによって構成されている。広報・発信セクションの岩波敦子副所長と事務局の石川が編集作業を担当した。A4版10ページで、制作は慶應義塾大学出版会、発行日は2006年1月25日である。

6. センター・ホームページの更新作業

広報・発信セクションメンバーおよび昨年度HPデザイン公募で入賞した理工学部の田中悠介君を中心として、ホームページの運営、管理が行われ、随時新着

コーディネート・オフィス  
日吉行事企画委員会  
(HAPP)

情報が更新されている。

なお次の出版物刊行に関する編集作業は、広報・発信セクション以外の担当者によって行われた。

7. センター選書の刊行

2005年度は2件の応募があり、厳正な審査の後、教養研究センター選書第3巻として、武藤浩史本塾法学部教授の『「ドラキュラ」からブンガク 血、のみならず、口のすべて』が採択され、2006年3月31日に刊行された。四六版変形 104 ページ、制作は慶應義塾大学出版会である。

8. 慶應義塾におけるドイツ年記念公開セミナー「ゲーテの『ファウスト』と脳内人工操作 21世紀における新人類「ホムンクルス」」の刊行

編集・校正は、本企画の立案者である石原あえか所員と、事務局によって行われた。A4版 28 ページで、制作は慶應義塾大学出版会である。

9. 慶應義塾におけるドイツ年記念公開セミナー「敵か味方か ロボットをめぐる文化」の刊行

編集・校正は、本企画の立案者である石原あえか所員と、事務局によって行われた。A4版 33 ページで、制作は慶應義塾大学出版会である。

広報・発信セクションの活動は多くの関係者のご協力なしには成り立たない。ご協力いただいた関係諸氏、教養研究センタースタッフ、ならびに慶應義塾大学出版会の坂上弘社長、編集部の小磯勝人氏に深く御礼申し上げます。

(岩波 敦子)



2005年度、日吉行事企画委員会(HAPP)は、例年通り、新入生歓迎行事と企画公募行事を開催した。この二つのセクションによる日吉行事企画委員会の活動は、学生・地域住民にも認知され、また事務作業も組織化されて日吉キャンパスに定着しつつある。

新入生歓迎行事セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を開催した。このうち、2005年度は、塾長講演会、能楽公演、舞踏公演、外国語教育研究センター講演会、塾長と日吉の森を歩こう、環境週間など、ほぼ前年度の企画を踏襲したものが相次いだ。ただし、枠組みは同じであるものの、内容は全く新しいものである。その意味で、新しいものが継続的に生まれてゆく体制をHAPPは創り上げたと言えるだろう。また、今年度が初めての、ジョン・チャヌ氏によるヴァイオリン・コンサート、ポジティブ・オルガンによる鍵盤音楽フェスティバルもそれぞれ好評のうちに終了した。これらの音楽関係のイベントも、大きな枠組みとしては、内容を新たにしながら、毎年開催しているものである。

一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画をHAPPが主催するものである。例年通り、新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終え、実行した。この中では、「戯曲『異郷の恋』初演」を強調したい。この企画は、文学部学生が、自ら受けた講義で知った永井荷風の未上演戯曲を、教員とコラボレーションを行いつつ上演したものである。正課としての授業と日吉行事企画委員会の活動が結びついたものとして有意義であったと考えている。なお、活動内容、委員会メンバーなどはホームページで公開され、随時更新されている。

さまざまな行事の主催者側として、日吉行事企画委員会は、安全であること、大学として行う価値のあるものを開催することの二点を常に留意している。2005年度、HAPPはある公募企画行事において、この観点から開催日の変更を含めて、企画提案者に強い指導を行った。結果として、公募行事は無事に終了することができた。この間、当該企画を担当したHAPP委員は、委員長および公募企画行事の総責任者と常に連絡を取りつつ、「渾身の説教」を交えて、学生を丁寧に指導した。まさに、日吉行事企画委員会が見事に機能した好例だったと自負している。

今後の課題としては、実行した様々な企画を、蓄積・公開する仕組みを作ることである。それぞれの行

事は大変充実したものであり、これがその場限りで消えてしまうのではなく、次の行事に繋がる必要がある。学術フロンティアとの連携、DMC との連携を

今後模索したいと考えている。

(小菅隼人)

## 2005 年度入学歓迎行事

### 1. 新入生歓迎行事

企画名	内容	開催日	場所
塾長と日吉で語ろう —安西祐一郎塾長講演会—	塾長講演会と懇談会	4/13(水) 17:15~18:45	第4校舎J24番教室
『天鼓 弄鼓之舞』(てんこ ろうこのまい)	坂井音重氏による能公演	4/26(火) 17:30~	来往舎イベントテラス
ジョン・チャス「愛」のコンサート ~ヴァイオリン演奏とトークによる未来へのメッセージ~	「愛」をテーマにしたジョン・チャスによるトークを交えながらのヴァイオリンコンサート	5/10(火) 17:00~18:30	来往舎イベントテラス
ハリー・ポッターの魔法とは!?	『ハリー・ポッター』の翻訳者・松岡佑子氏が語る翻訳・出版に至った経緯、物語の魅力・面白さ、翻訳の楽しさ・難しさ	5/12(木) 16:30~18:00	第4校舎J11番教室
『幻容の道』	和栗由紀夫氏による舞踏公演	5/18(水) 18:00~19:30	来往舎イベントテラス
ポジティブ・オルガンとチェンバロによる鍵盤音楽フェスティバル	ポジティブ・オルガンとチェンバロの演奏	5/下旬~2週間 (下記のとおり)	来往舎イベントテラス、シンポジウムスペース
塾長と日吉の森を歩こう	自然観察と写真展、塾長との交流	5/7(土) 13:00~	来往舎イベントテラス集合
環境週間		6/20(月)~6/25(土)	日吉キャンパス

5/24(火) 「チェンバロで奏でる現代音楽」エレイン・フナーロ(チェンバロ) (17:00~ 来往舎シンポジウムスペース)

5/27(金) 「新世代のバロック・ソナタ」石井明(バロック・フルート)、神戸愉樹美(ヴィオラ・ダ・ガンバ)、上尾直樹(チェンバロ) (17:00~ 来往舎シンポジウムスペース)

6/3(金) 広澤麻美チェンバロ・リサイタル「オール・バツハ・プログラム」広澤麻美(チェンバロ) (18:00~ 来往舎シンポジウムスペース)

6/8(水) 「ポジティブ・オルガンレクチャーコンサート」佐藤望(ポジティブ・オルガン) (13:00~ 来往舎イベントテラス)

### 2. 秋の公募企画行事

企画名	内容	開催日	場所
ママ・カクマ——難民キャンプから聞こえる詩	ケニアのカクマ難民キャンプ紹介、難民が創作した詩の朗読	10/7(金) 17:00~18:30	来往舎シンポジウムスペース
夏の夜の夢	シェークスピア劇の上演	11/28(月)	来往舎イベントテラス
日吉図書館開館20年——建築家「横文彦」と慶應義塾の建築物	日吉メディアセンターの設計者・横文彦氏の講演と、その設計による義塾の諸建築物のパネル展示	パネル展示 11/28(月)~12/1(木)	来往舎ギャラリー
		横文彦講演会 11/29(火) 17:00	来往舎シンポジウムスペース
戯曲「異郷の恋」初演	文学部と「三田文学」の生みの親・永井荷風の渡米100年にあたり、荷風の戯曲処女作「異郷の恋」上演	12/2(金) 18:15開演	来往舎イベントテラス
マジックの美術館 Act Museum	マジック、ジャグリング等の歴史などを交えた展示とマジックショー	展示 12/9(金)・10(土)	来往舎イベントテラス
		マジックショー 12/10(土) 14:00と18:00開演	来往舎シンポジウムスペース

## 1. 基本方針

当運営委員会では、2005年度極東証券寄附講座を企画するに当たり、過去5回の実績と反省点をふまえ、以下のような基本方針で臨むこととした。

2004年度に正規授業化して成功を収めた『生命の教養学』を春学期開講の半期授業として2005年度も設置する。運営委員会で討議を重ねた結果、2005年度のテーマを「生命と自己」とする。前年に引き続きコーディネーター制を継続して責任の所在をはっきりさせるとともに、コーディネーターの一部を入れ替え、これまでのノウハウを継承しつつ当該年度テーマにふさわしい新鮮な頭脳を取り入れる。形式としては、多彩な一流講師陣を描えられるように、前年と同じくオムニバス講座とする。理系学問と文系学問の対話・交流を心がけ、学生に21世紀にふさわしい生命をめぐる多彩な知の諸相を伝え教える。

これも2004年度に正規授業化して熱く盛り上がった『スタディ・スキルズ』『スタディ・スキルズ』を、塾内に同一名称の別科目がすでに存在することから『アカデミック・スキルズ』『アカデミック・スキルズ』と改称して継続する。大学での勉強の基本、すなわち授業を聞いて自分のテーマを発見し、自らリサーチを行って、その成果を口頭発表したりレポートにまとめたりする作業に必要な諸スキル習得のために、少人数の履修学生に複数の教員がついて懇切丁寧に指導する。『』と『』はそれぞれ半期科目ながらこれを続けて履修することで1年かけて本格的なアカデミックスキルを習得することができる。

また幅広い教養と具体的な学問的スキルの双方の習得のために、上記2講座を共に履修してこれをテーマ発見やレポート作成に生かすことを奨励する。

## 2. 極東証券寄附講座『生命の教養学』

石原あえか、熊倉敬聡、武藤浩史、鈴木伸一の4名がコーディネーターに任命され、2005年度のテーマに従い、講義要綱には「生命と自己 今、『自分』が、『生きている』とは？」をサブテーマとして掲げた。以下、講義要綱から引用する 「21世紀の人間社会において、生命科学の飛躍的な発展に伴う諸問題の生起とともに、そして複雑化する現代社会の生き難さとともに、ますます重要度を増してきた『生命』というテーマをめぐって、文系と理系のあらゆる学部を横断する総合的・複合的思考力の構築を目指した講義を行いたい。そのために、当講座では塾内外を問わず第

一線で活躍する研究者等を講師に招いて多彩な領域における多彩な講義を展開する。コーディネーター役は本塾の4人が担当する。/春学期開講の本年度は、『生命と自己』というテーマを設定して、『自分』が『生きている』という一見自明に思えて実のところは不思議きわまりない事態を、さまざまな観点から、根源的に見直してみたいと思う。脳科学と哲学と芸術と仏教などなどが出会う、他に類のない刺激的な場所にしたいと思っている。」

講座は、日吉キャンパス来往舎1階のシンポジウム・スペースにおいて行われたが、講師とその所属、および講義タイトルは以下のとおりである。

- 4月14日 ガイダンス
- 4月21日 養老孟司(北里大学教授): 生命と脳と自己
- 4月28日 河本英夫(東洋大学教授): 生命の自己制作(オートポイエーシス)
- 5月12日 中島陽子(義塾文学部教授): 生物学的自己 遺伝子/神経系・内分泌系・免疫系
- 5月19日 秋田光彦(大連寺住職): アート・いのち・仏教
- 5月26日 斉藤環(精神科医師): 生命と表現リアルとは何か
- 6月2日 安藤寿康(義塾文学部教授): 心も遺伝的である
- 6月9日 石原あえか(義塾商学部助教授): 自然研究者としてのゲーテ 近代ドイツ文学と科学
- 6月16日 椿昇(京都造形芸術大学教授): アバルト・ヘイト・ウォールとパレスチナ 傍観者から当事者へ
- 6月23日 安西祐一郎(塾長): 生命と認知
- 6月30日 池内了(早稲田大学国際教養学部教授): 宇宙史における生命
- 7月7日 前野隆司(義塾理工学部助教授): ヒトとロボットの心
- 7月14日 まとめ

講師陣が示すとおり、医学、哲学、生物学、宗教学、精神分析、心理学、文学・科学史、芸術学、認知科学、物理学、ロボット工学と、ありとあらゆる領域の第一人者が、生命と自己についての考えを披瀝した。それぞれの講義の最初と最後でその回の責任担当コーディネーターがコメントを述べ、また履修生からの質問・コ

メントを促すことで、多種多様な講義に有機的な相互  
 連関が備わるようにした。

### 3. 極東証券寄附講座『アカデミック・スキルズ』

2003年度後期に実験授業として立ち上げられ2004  
 年度に初めて正規授業化された『スタディ・スキルズ』  
 が、名称を『アカデミック・スキルズ』と変えて、継続さ  
 れた。自ら考え、調べ、論ずることが学問の出発点で  
 あるとともに長い人生を送る上で不可欠な「教養」とい  
 う知的体力涵養の基盤であるという考えに立って、そ  
 の習得を目指して、問題意識の喚起、具体的問題発見  
 の方法に始まり、リサーチ、プレゼンテーション、レポー  
 ト・論文執筆のスキルを身につけることがこの授業の  
 目的である。履修者はもう一つの極東証券寄附講座で  
 ある『生命の教養学』あるいは法学部設置講座『身体/  
 感覚文化』をも合わせて履修し、後期開講の『アカデ  
 ミック・スキルズ』では、そこからテーマを発見してリ  
 サーチ・プレゼンテーション準備・レポート執筆をする  
 というのが原則とされた。前期開講の『アカデミック・  
 スキルズ』においては、レポート執筆を中心として、  
 より基礎的な学問的スキルの訓練に力がそそがれた。

2005年度は前年よりも1クラス増設して、計3クラ  
 ス。担当者は月曜日(湯川武、佐藤望、横山千晶)、水  
 曜日(鶴崎明彦、加茂具樹、武藤浩史)、木曜日(近藤  
 明彦、石原あえか、鈴木伸一、大出敦)。履修者の総数  
 は52名。

なお、年度末の2006年2月8日に履修学生の成果  
 を公表すべく、来往舎シンポジウム・スペースにて  
 公開プレゼンテーション・コンペティションが行われた。  
 大学1、2年生とは思えぬほどの高レベルの口頭発表  
 がなされ、プレゼンテーション部門金賞、銀賞、銅賞各  
 1名、奨励賞2名、論文部門優秀賞3名、奨励賞3名  
 が選ばれ、表彰された。

### 4 『生命の教養学 生命と進化』出版へ向けて

昨年度活動報告書に記した通り、好評を博した  
 2004年度の『生命の教養学』の講義集出版に向けて  
 作業が着々と進められた。企画趣旨については出版  
 企画書から引用しよう。「本企画は、本年(2005年)  
 出版の『生命の教養学へ』を嚆矢とする「生命の教養  
 学」シリーズの続編として、いよいよ授業化され話題を  
 呼んだ2004年度極東証券寄附講座の講義を本にまと  
 めて、その成果を世に問おうとするものである。/ 21  
 世紀サイエンスと人間社会における根源的なテーマで

ある「生命」を焦点として、文系と理系のあらゆる学部  
 を横断した総合的思考力の構築を旨とする極東証券寄  
 附講座「生命の教養学」の2004年度のテーマは「進  
 化」だった。5名の生命関連領域の科学者(金子洋  
 之/阿形清和/澤口俊之/団まりな/和合治久)と4  
 名の歴史・科学論・文学研究者(鈴木晃仁/小川眞里  
 子/武藤浩史/田上竜也)が、「進化」をキーワードに、  
 現代サイエンスが解き明かした生命の成り立ちと、人  
 間の社会・歴史におけるその意味について、洞察を深  
 めた。/具体的には、理系研究者が、「私たち人間は、  
 今からまだ進化できるのか?」という問いに対する答え  
 を、私たち人間が持つ精緻な生命システムである「脳」、  
 「性」、「免疫」の3つに焦点を合わせ、それぞれの立場  
 から述べた。「脳」という観点からは阿形と澤口が「性」  
 という観点からは団が、「免疫」という観点からは和合  
 が、それぞれの洞察を披瀝した。一方、文系の側から  
 は、医学史(鈴木)、科学論(小川)、文学・言語研究(武  
 藤)の専門家が、「進化」思想が喚起する現代のそして  
 歴史上の諸問題について多彩な思考を展開すること  
 になった。金子がイントロダクションの講義を行い、田  
 上が最後の授業で、総括をするとともに、理系・文系研  
 究者の対話を促した。」

なお、金子が本書編集に当たり、武藤がその補助役  
 を務めている。事情により田上のまともは割愛し、以  
 下の構成で出版へ向けて準備が進められた。出版予  
 定は2006年10月である。

#### 本書構成

#### 序 金子洋之

#### 第1部 進化と脳・性・免疫

「脳の高次機能の進化」澤口俊之

「性の進化」団まりな

「免疫の進化」和合治久

#### 第2部 進化と歴史・言語

「進化論と医学」鈴木晃仁

「文系的進化論 言語・進歩・進化」武藤浩史

「進化論とダーウインの時代」小川眞里子

### 5. その他(委員会日程、委員構成)

#### ・2005年度運営委員会会議日程

第1回 2005年7月14日

・2005年度運営委員 中島陽子(文学部)、羽田功  
 (経済学部)、石原あえか(商学部)、田上竜也(商学  
 部)、熊倉敬聡(理工学部)、近藤幸夫(理工学部)、横  
 山千晶(法学部、教養研究センター所長)、武藤浩史

コーディネート・オフィス  
日吉キャンパス  
公開講座運営委員会

(法学部、委員長) 鈴木伸一(医学部)、近藤明彦(体育研究所)、河邊博史(保健管理センター)、小磯勝人(慶應義塾大学出版会)、宮木さえみ(教養研究センター事務長、2005.10 まで)、吉川智江(教養研究センター事務長、2005.11 から)

(武藤浩史)

2005 年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座は、テーマとして「創作とメディア」を掲げ、趣旨としては、「人間が何かを創り出そうとする時、言語(文字や音声、小説や詩など文学)、音楽、美術、映像、演劇、スポーツといった多様な媒体、すなわちメディアは、その創作に形式を与え、同時にまた伝達的手段としても機能する。人間の創作パフォーマンスとメディアの関係を考えることが、歴史や文化・社会について考える上でのひとつの視点ともなりうる」ということである。

2005 年 10 月 1 日から 12 月 3 日までの毎週土曜日の 3 時限目と 4 時限目、全部で 10 回行った。申し込み数は、239 名で、毎回の出席率は、80 パーセント前後。今回も大変熱心な参加者に恵まれた。

「映画におけるラテンアメリカのイメージ(石井康史・経・助教授)にはじまり、「ハリウッド映画に見るアラブの表象(村上由見子・文・非常勤講師)で終わったが、米・仏・日本映画に見られるラテンアメリカ像のステレオタイプを分析されており、また 9・11 のテロをきっかけにアメリカのアラブ政策(イスラエル問題も含む)の歴史を見直す試みを、映像を通して、見事になされた。

テレビ・メディアに関しては、「構成とは何か～情報化時代の映像論理(丸山俊一・NHK チーフプロデューサー)で、番組はディレクターが作り手なのか、それとも作り手は不在で、集団で作るのか、という仮説を提示されて、編集や物語の解体のことを、「英語でしゃべらナイト」を例に話された。「視えない媒体 電波

ラジオとドイツ人(識名章喜氏・商・教授)では、電波というメディアの歴史を概括したあとで、ドイツの大衆小説が扱ったラジオ小説に及んだ。

「スポーツとメディア(青島健太・スポーツキャスター)では、メジャーリーグと日本のプロ野球の違いを、テレビ解説などに注目しながら、「ストライク」の意味を中心に、攻撃性と守備重視の対比にあると熱く語られた。また「一流アスリートとメディア(田中ウルヴェ京・元シンクロ五輪選手)では、アスリートのメディア活用のあり方を、win-win の関係、共感力 自己認識能力というキーワードで、示された。

「メディアと政治(河野太郎・衆議院議員)では、さまざまな政治的問題を詳しいデータをもとに示し、それらをメディアがどう取り上げるかの重要性を判りやすく解説された。

美術や芸術とメディアに関しては、「アロイス・ツェトル 動物譜の復活(宮川尚理・理工・助教授)や「シュルレアリスムのメディア(朝吹亮二・法・教授)が、

## 「ゲーテのファウスト と脳内人工操作」

19世紀20世紀におけるメディア＝豊媒のあり方を豊富な資料で活写されていた。また「禅と私の創作活動」(柘野俊明・徳雄山建功寺住職)では、日本の庭園と欧米の庭園を同時に映写しながら、比較検討し、禅による美意識を解説され、自らの作品を提示された。

文学では、「森鷗外のメディア感覚と創作」(井戸田総一郎・明治大学・文・教授)で、鷗外の戯曲翻訳を中心にメディア感覚を述べられ、「古典の想像力、現代の創造力 過去を現代によみがえらせる『メディア』」(横山千晶・法・教授)で、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』という古典的な作品が、現代の三つの映画にいかにか読み変えられ、時代を超えて生き返っているかを示された。「メディアとしての文学・音楽・映画そして映像と音響の融合」(小瀧昭夫・経・教授)では、ギリシア悲劇や聖書が19・20世紀のさまざまなメディア芸術に活かされたかを示した。

「メディアとしての「脱芸術」「芸術」(から)の三段階を考える」(熊倉敬聡・理工・教授)では、近代的システムから逸脱する様々な行為とリンクする脱芸術のあり方を示された。また「デジタル化時代の音楽とメディア」(佐藤望・商・助教授)では、現在起こっている音楽著作権問題を念頭に入れながら、芸術とは何か、芸術作品とは何かを、歴史的に理論的に解明された。そして「電子メディアの言語状況」(井上逸兵・法・教授)では、現在起きているコミュニケーション革命のなかでは言語現象を社会言語学の視点から交通整理をされていた。

今回のテーマは、極めて今日的なテーマであり、未来を予測する指標になりうる講座だった。なお、運営委員会では、情報宣伝のあり方、講座の複線化、将来の方向性などを話し合ってきたが、結論は出ず、引き続いて検討することにした。

(小瀧昭夫)

上記公開講演会が2005年11月1日(火)午後17時から19時15分まで、日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースで開催された。講演者は、現代ドイツを代表する知識人で法学博士でもあるマンフレート・オステン氏。氏はドイツ外務省入省以来、さまざまな国のドイツ大使館でキャリアを積み重ね(うち1986-1992年、東京ドイツ大使館勤務)その後1995年から2003年末までドイツを代表する学術団体のひとつ、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の事務総長を務めた。2005年秋は、「日本におけるドイツ年」の財団事務総長代理としての来日で、講演者本人より、早くからこの機会に本塾で講演したいという打診を受けていた。このため小泉信三記念慶應義塾学事振興基金の「外国人学者招聘費補助」を申請、講演実施に必要な経費の一部に充てた。

今回の演題は、「ゲーテの『ファウスト』と脳内人工操作：21世紀における新人類・ホムンクルス」(原題 *Goethes Faust und die künstliche Optimierung des menschlichen Gehirns. Zur natur- und geisteswissenschaftlichen Aktualität des Homunculus im 21. Jahrhundert*)で、ドイツを代表する作家ゲーテの難解な悲劇『ファウスト』に登場する人造人間ホムンクルスを扱った。これは主に、2003年にInsel社から出版された氏のゲーテに関するエッセイ *Alles veloziferisch oder Goethes Entdeckung der Langsamkeit*。(邦訳すると『すべては悪魔的速度でまたはゲーテによるスローテンポの発見』)がベースとなっている。

このような専門的内容を扱うドイツ語講演を三田でなく、敢えて日吉で開催したのは、以下の理由と目的があった。まず理由としては、講演内容が、特にドイツ国内のゲーテ研究で最もアクチュアルな問題「ゲーテの自然研究者としての活動」および「現代科学(特にクローン問題・脳科学)との関わり」を扱っていたこと。ゆえに1)真の人文科学研究には、科学史を含むオールラウンドな教養が必要であることを学生に提示する。2)日本国内とドイツを含む欧州における文学研究の決定的差異・背景とする文学伝統の違いを示す。3)矢上および日吉の自然科学系教員・学生にも広く参加を求め、人文・自然科学の境界を超えた、領域横断的な知的な会話の場を提供する。4)2005年が「日本におけるドイツ年」であることを考慮し、学

術講演という形で、洗練された美しいドイツ語の響きを、多くの人に聴いてもらうこと。以上4点が、本企画の主なねらいだった。

日吉における本格的な独文学に関するドイツ語の学術講演という性質上、早くから日吉ドイツ語部会に協力を要請、並行して「日本独文学会」や「ゲーテ自然科学の集い」等の学術団体HPにも広告を掲載してもらった。10月中旬からは、写真入りポスターとピラを作成、非常勤のドイツ語教員にも直接ピラを配布し、授業内での学生への宣伝協力を依頼した。この結果、塾内の学生・教員はもとより、塾外研究者・一般参加者を含めて約70名が出席、このような文学系講演会としては、予想以上の集客が得られた。

ドイツ語の知識がない出席者に対しては、講演原稿を日本語に全訳し、PowerPointを使って計103シートの同時字幕を作成し、スクリーンに投影した(石原担当)。質疑応答には専門逐次通訳を1名つけ、便宜を図った。この新機軸「翻訳&通訳の二本立て」は、大変好評を得た。このような周到的な準備が功を奏し、講演はもとより、ディスカッションも非常に内容の濃いものとなった。また講演企画のねらいも参加者に正確に伝わったようで、講演後「学問レベルの高さに圧倒された」、「ゲーテを大切に読み返してみたい」という学生の素直な感想はもとより、教員からも「日常とは異なる世界で沢山の刺激を受け、エキサイトした」、「ヨーロッパ的知識のひとつの原型を見た」、「(通常日吉では文学を語る以前に、語学を教える場になってしまうが、)こんな風に知的に語らえる場所があるのは嬉しい」など、メールや手紙による好意的な感想が次々と寄せられたのは、企画者としても大変嬉しかった。本セミナーは、教養研究センター発行の「CLAアーカイブズ3」として日独二か国語による詳細な研究報告集が、2006年3月末日に慶應義塾大学出版会から刊行された。

なお、講演後のファカルティ・ラウンジでの懇親会は、20時半まで20余名が出席し、オステン氏と和やかながら、さらに深い議論を交わす機会を提供できた。最後に、この企画実現については国際センターからも、ひとかたならぬお力添えをいただいた。ここに改めて心からお礼申し上げたい。

(石原あえか)



## 「敵か味方か

## ロボットをめぐる文化」

本公開セミナーは、ドイツ・ケルン大学哲学部教授ハンス・エッセルボルン氏が日本学術振興会・海外招聘研究者(短期)に採用が決まったことを受け、企画・開催された。この事業は、「優れた研究業績を有する外国人研究者を短期間招聘し、我が国の研究者との討議・意見交換・講演等を通じて関係分野の研究の発展に寄与すること」を目的とする。募集は毎年春と夏の2回行われ、日本側受け入れ研究者が所属研究機関を通して申請することになっている(外国人研究者は、別途、日本学術振興会の海外パートナー財団に申請するので、時間に余裕をみる必要がある)。今回の受け入れ研究者は、私・石原が担当、研究課題は「国際的ジャンルとしてのサイエンス・フィクション：独語圏および英語圏SF文学の多様性と日本における同義的作品の比較」とした。

エッセルボルン氏は、18世紀ドイツにおける人気作家ジャン・パウル研究者として知られる。しかし近年これと並行して、SFに関する研究にも力を入れており、特に2000年からは毎夏、ケルン大学哲学部で「SFの夕べ」を主宰し、ドイツ語圏のSF作家を招いている。また、氏が編集したフランスの研究者と行った二国間共同コロキウム講演集『ユートピア、反ユートピア、そして20世紀のドイツSF文学』(2003)には、ドイツSFに関する研究も多く含まれている。なお、2005年11月の日本滞在には、ヘルマン・ヘッセおよびアカデミック・ライティングの研究者として知られる夫人ヘルガ・エッセルボルン・クルムビーゲル博士を同伴され、本セミナーの前日10日に女史のFDセミナーも日吉で開催される運びとなった。

さて、本公開セミナーは2005年11月11日(金)、午後18時15分より日吉J14番教室にて、ドイツSF作品に詳しい識名章喜氏(商学部)の司会で開催された。最初にエッセルボルン氏が約40分、アシモフのロボット工学三原則と彼のロボット短編集を手がかりに、『コンピューターとロボットに敵意が生じるか?』というテーマで独文学者としての視点からドイツ語で講演した。独語原題は、*Können Roboter und Computer böse sein?*で、ドイツ語の知識がない方のために、石原が予め講演原稿を全訳し、パワーポイントを使って100シート近い字幕スクリーンに作り変え、当日の講演中は、講演と同時に背後のスクリーンに投影した。エッセルボルン氏は、H.W.フランケやH.ハウザーなどドイツSF作品も紹介しつつ、SF文学に仮託された問題、すなわち機械による職務遂行・論理的計算の枠組みの中にお

かれていいる人間存在について考察した。

続いてコメンテーター・巽孝之氏(文学部)が、SF作家・柴野拓美による「SFとは人間理性の産物が人間理性の制御を離れて自走することを意識した文学である」という定義を紹介しつつ、約20分のミニ・レクチャーを行った。巽氏は、英米文学者の視点から、W.ギブスンらポスト・ヒューマニズム思想と連動したSFでは、むしろ人間こそ「肉人形」=ロボットとする逆転描写が行なわれたこと、またE.トムソンの『ヴァーチャル・ガール』やG.イーガンの『ディアスポラ』等、新傾向の現代SF作品を紹介し、エッセルボルン氏の講演内容を補足した。続いて同じくコメンテーターの前野隆司氏(理工学部)がロボット工学者の視点から、「人の意識は解明可能か」、「ロボットの意識は作れるか」という最新トピックについて第二のミニ・レクチャーを行った。

会場の参加者を含めた質疑応答は、専門同時通訳(ウイスパー)を2名つける万全の配慮をしたので、活発な意見交換が続き、セミナー終了後もなお各講演者に直接質問する学生の姿が見受けられた。

「慶應におけるドイツ年」の一環として行われた本セミナーであるが、英米文学や工学分野からも参加者を得て、日独文学研究比較に留まらない、領域横断的でユニークなものとなった。早くからポスターやホームページ等を用いて宣伝活動を行った結果、三田祭準備前・5時間目終了後開始という悪条件にもかかわらず、通常の講演会と比較しても、十分な集客があった。またセミナー終了後、学生および教員からも「面白かった」「知らない内容が多く、興味深かった」など、好意的な感想が寄せられた。2007年には、パシフィコ横浜でアジア初の世界SF大会開催が決定しており、本研究テーマについては今後も共同研究の継続を期待したい。

なお、本セミナーについては、氏のオリジナル講演原稿を掲載した日独二か国語版の研究報告書が、教養研究センター発行「CLAアーカイブズ5」として2006年3月末日に慶應義塾大学出版会から刊行された。

(石原あえか)

## 研究目的

大学の環境が変化するなかで、大学が次代に伝えていくべき知の体系および教養のあり方を再検討するとともに、現在慶應義塾大学で行われている教育カリキュラムの在り方を検証している。その上で、今後あるべき大学カリキュラムに関する提言を行うことを目指している。

## 研究背景

教養研究センターのミッションは、教養研究センター立ち上げの中心となったメンバーが2002年に報告書を提出した文部科学省委託研究『教養教育グランド・デザイン』をたたき台に作り上げられている。そこでは、大学における知の体系各領域(文化知、社会知、科学知、言語知、身体知、複合知)の連携をとりながらの全人的教育をいかに行うか、という問いに対して、カリキュラム・モデルというかたちでひとつの答えを提示した。

教養研究センターではその後、2003年度から2004年度にかけて、日吉における学部共通総合教育科目に関する総合的な分析と問題整理を行い、現実には繰り返られている教育の短期から中長期に渡る改善の提言を行った。

前者の『教養教育グランド・デザイン』は、理念型研究であり、後者の総合教育科目研究は現状改善を目指した提言書である。次の段階としては、現在行われている教育をさらに広く深い視点から検証し、現実と理想をさらに整合させるための指針の作成および政策研究が必要になって来ていると考えられる。

## 研究経過

本研究は2006年までの2年計画で進められているが、2005年度は主に次の3つの事項を柱に研究を進めてきた。現在の大学教育の問題をマクロ的視点から検証、義塾におけるカリキュラムをめぐる諸問題について検証、カリキュラムに関するデータ収集と提言作成のための予備調査、以上である。

第1のマクロ的検証においては義塾内外から招いた講師による、以下のような対談、講演会・勉強会を開催した。遠山敦子氏(元文部科学大臣)と安西祐一郎氏(慶應義塾長)の対談「教養教育の将来を見据えて

次世代に何をどう伝えるか」、大西直樹氏(国際基督教大学教授)講演「大学カリキュラムにおける履修登録制度とGPA制度 大学教育の質を確保するための

戦略」、出口雅久氏(立命館大学教授)講演「大学カリキュラムにおける国際教育 専門教育と語学教育の融合の問題」、高橋義人氏(京都大学大学院教授)講演「国立大学改革と今後の大学教育 京都大学を例として」、米澤彰純氏(大学評価・学位授与機構助教授)講演「大学評価と質保証政策の国際的動向」以上である。

第2の慶應義塾におけるカリキュラムの諸問題に関する検証という部分に関しては、義塾内から講師を招いて研究会を開いた。上記安西塾長の対談は、マクロ的な視点と慶應義塾の教育実践との関連を明らかにしようとするものであり、その他、小尾晋之介氏(理工学部教授・国際センター所長)講演「慶應義塾における国際連携プログラムの展開シナリオ」、境一三氏(経済学部教授・外国語教育研究センター副所長)講演「慶應義塾大学における外国語教育の現状と改革の展望について」も行き、ディスカッションを進めてきた。

上記第1、第2部分の記録は、教養研究センター「CLA アーカイブズ 2、6、7」として刊行された(<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/journal.html>を参照)。

第3の部分の独自調査および提言作成の部分に関しては、それぞれ幹事が中心となり分担を決めて、現在の授業における成績評価方法の調査、外国語科目の実施可能なプランの策定、米国のリベラル・アーツ・カレッジのカリキュラム調査、学部カリキュラムの比較調査、カリキュラムに関する学生アンケートなどを行ってきた。

## 最終目標

大学という知的生産の共同体において、われわれは学生に何を伝えていくのか、学生をどのように育てていくか、いわゆる学力とともに、それを越えたさまざまな能力、すなわち知的生産技術やコミュニケーション能力の向上や、国際的に通用する人材の育成、真の教育の質の向上のために、何ができるのかについて、広い視点から学び合い、研究する場としてこの基盤研究を展開しており、最終的には2006年度末に、カリキュラムに関する調査・分析、および短期的・中期的に実施可能なプランについて書かれた報告書を作成する予定である。

基盤研究メンバー(2005年度)

大場茂、倉田敬子、坂本光(幹事)、納富信留、石井明(幹事)、伊藤行雄(座長)、岩谷十郎、大久保教宏、木

侯章、小屋逸樹、鈴木透、種村和史、佐藤望(幹事)、小町谷尚子、金田一真澄(座長代理・幹事)、萩原眞一(幹事)、太田達也、村山光義、倉館健一、小磯勝人、横山千晶(教養研究センター所長)、近藤明彦(同副所長)、岩波敦子(同)、田上竜也(同)

(佐藤望)

## 研究活動

# 基盤研究 身体知プロジェクト

### 1. 基盤研究「身体知プロジェクト」の発足について

昨今哲学および芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がさまざまな場面で語られるようになってきている。それは単に肉体としての身体のみならず、人間をホリスティックにとらえた上での身体を扱っており、当然ながらそこには精神性や感情論も含まれてきている。このような身体に対する議論の背景には、時代の突きつけるひとつの危機感があることは否めない。つまりテクノロジーの波の中で希薄化する身体存在やコントロール不可能な精神・感情・情緒といった諸現象であり、それらの危機感は教育現場で切実に意識されているものでもある。

同時に教育に関わるものが、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、その意識を共有していくことは重要であろう。そのような見地のもとに、21世紀に生きる私たちが再建もしくは発見すべき「身体」は何であり、それをひとつの「知」とした上で次世代に伝えていくにはどのようにしたらよいのかを教職一体となって考える場として2005年に発足したのが、本プロジェクトである。ここでは、上に述べた基盤に立った上で身体知教育の実践と理論化を試み、広く外部に発信することを目標としている。具体的な研究手法としては、理論構築と並行した実践を行うことにより、常に理論を見直す作業を繰り返すことで、既存・および議論されている理論の有効性を確認しつつ、慶應義塾発の新たな「知」のあり方を提言したいと考えている。

### 2. 2005年度の活動内容について

2005年度は、月例研究会の形式で、参加者がそれぞれ教育現場において培ってきた「身体」のあり方と教育へのかかわり方、および既存の「身体知」に関する理論をめぐって意見交換と報告会を行うと同時に、ワークショップを通じておのれの身体と向き合う機会を設けた。これらの作業を通じて2006年度は理論構築の足場を築き、実験授業を通じた実践の場を設ける予定である。

以下、具体的にその活動内容を紹介する。

#### 第1回

(日時)2005年5月13日(金) 18:15 ~ 20:30

(場所)来往舎、101/102

(出席者)石井明、岩波敦子、熊倉敬聡、佐藤望、手塚千鶴子、篠塚憲一、田上竜也、武藤浩史、横山千晶

**(議題)**

「身体知」プロジェクトの目的と方法について  
プロジェクトの基本理念を確認し、目的達成の手順を話し合った。

教育の現場における身体知のあり方について  
メンバーそれぞれの身体知観、および身体へのかわり方の紹介のあと、教育現場における身体知のあり方について話し合いが持たれた。

**第2回**

(日時)2005年6月21日(火) 18:30 ~ 20:30

(場所)来往舎、101/102

(出席者)小菅隼人、近藤明彦、熊倉敬聡、篠塚憲一、手塚千鶴子、武藤浩史、横山千晶

**(議題)**

「身体知」プロジェクトの目的と方法について(その2)  
前回の月例研究会に引き続き、プロジェクトの目的と方法について具体的な話し合いが持たれた。その中で以下の点が確認された。

**1)「身体知」の意味について**

- ・現場での認識から生まれるもの
- ・理論と経験をつなぎ、絶えず両者を変化させていくもの

- ・ひとつのコミュニケーション能力

**2)「歴史」の重要性**

- ・過去の「歴史」認識の重要性

現在の事象として参加し、アーカイブ化する重要性

**3)本プロジェクトが目指す「身体知」とは**

- ・教養教育としての位置づけ
- ・歴史と現場を知る。同時に記録を残す。
- ・実践の場とのタイアップをはかる。
- ・教育者の認識をうながす場とする。

これからのプロジェクト運営の方法

メンバーは広く呼びかけ、コア・メンバーがリエゾン・チームとなる。また研究会のオーガナイザーを各回持ち回りとする。報告や発信方法も、HPや言語化されたもの以外、さまざまな形態を考える。

**第3回**

報告会「身体のもダンとポストモダン 21世紀の大学は身体知をいかに捉えるべきか?」

(日時)2005年7月22日(金)14:00 ~ 17:00

(場所)慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎アトリウム

(オーガナイザー・発表者)熊倉敬聡

(参加者)小菅隼人、近藤明彦、坂倉杏介、佐藤望、篠塚憲一、武藤浩史、横山千晶

(内容)前回までの月例会を踏まえての報告会の開催。今回は、発表者が現在三田通り商店街振興組合と協働で行っている「大学 - 地域交流ラウンジ」で使用している一種の屋台「MITAYATAI」を来往舎アトリウムの一角に設え、それを囲む形で行った。オーガナイザーによる発表とそれに基づく討議の2部構成をとり、参加者は「ポストモダン」という時代における心身の状況を見据え、その中での教育の可能性を議論した。

**第4回**

(日時)2005年10月25日(火)18:30 ~ 20:00

(場所)来往舎応接会議室

(参加者)岡原正幸、熊倉敬聡、小菅隼人、佐藤望、篠塚憲一、手塚千鶴子、武藤浩史、横山千晶

**(議題)**

2006年度秋学期開講予定の実験授業の立ち上げについて

2006年度後期に「身体知」をめぐる実験授業を立ち上げ、そこでの成果を積極的に研究とリンクさせていく企画を具体化させるために、授業の内容について考察した。今回はそれぞれの参加者がいままでかかってきた身体知教育を通じて見えてくるカリキュラムについて発表し、意見交換を行った。

教員向けの広報について

で論じられたカリキュラムを構築する中で、重要になってくることは「教職員」をいかにこの身体知教育の実現に巻き込んでいくのか、ということである。学生の身体知教育を考えると同時に、教職員の身体知意識を高めていくことの重要性が確認された。

特定研究「学術フロンティア」のコンテンツ研究ユニットとの協力

教養研究センターの「超表象デジタル研究 表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築」が特定研究として学術フロンティア採択事業となった。今後は学術フロンティアの研究組織と共同で研究を進めていくことが確認された。

**第5回**

ワークショップ「感じること、表現すること、理解すること:瞑想から身体知へ」

(日時)2005年11月28日(月)18:30 ~ 21:00

(場所)日吉キャンパス教職員談話室

(講師)井上ウイマラ氏(仏教瞑想法、高野山大学スピリチュアル・ケア学科助教授)

(オーガナイザー)手塚千鶴子

(出席者)江頭紀明、岡原正幸、熊倉敬聡、篠塚憲一、武藤浩史、横山千晶

(ワークショップの内容)

今回の月例会は、井上ウイマラ氏を講師にお招きし、氏の著書『呼吸法による気づきの教え』(佼成出版社、2005年)に基づいて、呼吸という原初的な身体の営みを通して、自己と他者を知るワークショップを行った。今回のワークショップは来年度から開講する実験授業の内容を参加者自らが体験する場でもあった。その観点から、実習のあと、「語ること」とワークショップ中に感じたことを視覚的に「描くこと」を通じてのディブリーフィングを経て、ワークショップの持つ意義について意見を交換した。

第6回

(日時)2005年12月24日(土)15:00 ~ 18:00

(場所)日吉キャンパス教職員談話室

(参加者)熊倉敬聡、篠塚憲一、手塚千鶴子、武藤浩史、横山千晶

(議題)2006年度身体知実験授業の案について

実際に2006年度に開講する実験授業案を参加者が持ち寄り、その骨子を説明しあった。また半期にするか通年にするか、授業回数などについても話し合いが持たれた。

第7回

(日時)2006年2月9日(木)15:00 ~ 18:00

(場所)日吉キャンパス教職員談話室

(参加者)岡原正幸、熊倉敬聡、近藤明彦、小菅隼人、佐藤望、篠塚憲一、園田陽子、手塚千鶴子、武藤浩史、横山千晶

(議題)以下の事項を確認・検討した。

2006年度身体知実験授業のカリキュラムの決定

2006年度の秋から半期開講することに決定。授業のコーディネーターは、プロジェクトのコア・メンバーである手塚千鶴子と熊倉敬聡が担当する。

学術フロンティア「身体知教育」プロジェクト、および「21世紀型キャンパス基本構想」プロジェクトの研究進捗状況について

担当者の小菅隼人、熊倉敬聡から説明があった。

第4校舎における身体知教育を進めていくための

オフィスプランについての話し合い

第8回 身体知プロジェクト合宿会議

(日時)2006年3月28日(火)、29日(水)

(場所)湘南国際村

(参加者)熊倉敬聡、近藤明彦、佐藤望、篠塚憲一、手塚千鶴子、武藤浩史、横山千晶

(議題)以下のことが確認された。

2006年度の活動案

- 1)参加者各自の研究エッセンスの共有
- 2)実験授業の実施。2006年度の秋学期開講のものに引き続き、今後、随時実験授業案を立ち上げ、実行する。
- 3)1)と2)、つまり理論構築と実践とを同時に行いつつ、そこから何らかの発見・研究・発信を行う。
- 4)慶應義塾のカリキュラムにおける身体知教育のあり方を考える。

研究の重点

- 1)目的達成よりも教育のプロセスを重視する。
- 2)カリキュラム外教育(ボランティア活動など)の意義を同時に探る。
- 3)理論構築と実践を並行して行う。
- 4)プロジェクトの広報を活発に行うとともに、研究のエッセンスを共有できるプログラムを作成する。

メンバーについて

研究会は、職員(ボランティア参加)、教職課程センター、そのほか学生の参加も奨励する。実験授業に関しては、社会人、中・高校生などさまざまな参加者に広く門戸を開く形式にする。

(横山千晶)

学術フロンティア「超表象デジタル研究」概要

本研究プロジェクトは2000年から2004年にかけて展開された文部科学省学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトの成果を背景として、新たな教養(リベラル・アーツ)教育に関するメタ理論、メタ理論に基づくカリキュラム・モデルとカリキュラム実施を可能とするキャンパス・モデルの構築を目的としている。

研究拠点は慶應義塾大学教養研究センター(日吉キャンパス)であるが、国内外のいくつかの研究・教育機関などとの連携・協力のもとに活動を進めている。研究期間(文部科学省による助成期間)は2005年度から2007年度であり、本年度はその初年度にあたる。

研究テーマと研究組織は以下の通りである。

「メタ理論とモデル構築」研究(下記 ~ の統合的研究)(研究組織: 統合研究ボード)

- (1) 新たなリベラル・アーツ教育(教養教育)のメタ理論構築
- (2) メタ理論に基づくカリキュラム・モデルの作成
- (3) 21世紀型キャンパス基本構想の策定

「学びの形態」研究(研究組織: コンテンツ研究ユニット)

- (1) 「温故知新」型教育プログラム
- (2) 「身体知」教育プログラム
- (3) 「現代における危機的問題」教育プログラム
- (4) 導入教育プログラム

「学びの場」研究(研究組織: 学習環境構築研究ユニット)

- (1) 「21世紀型キャンパス基本構想」研究
- (2) 「バリアフリー・キャンパス構築」モデル
- (3) 「コミュニケーション・キャンパ

ス構築」モデル

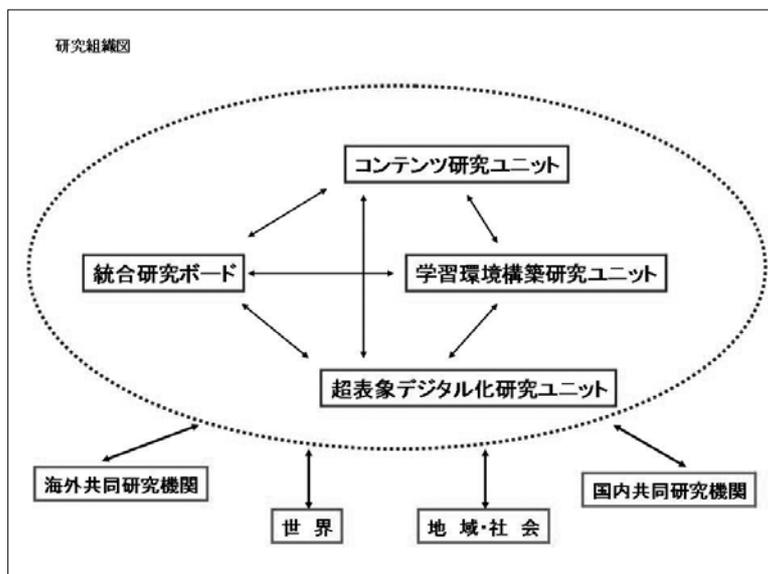
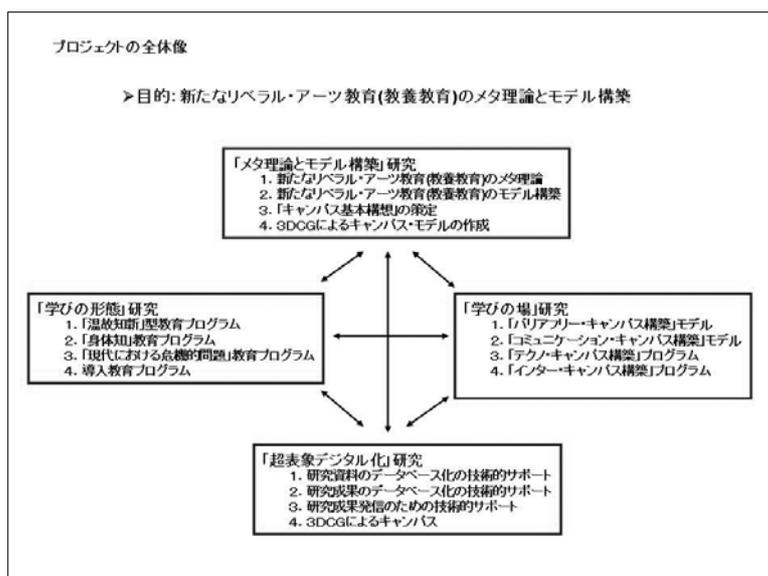
- (4) 「テクノ・キャンパス構築」プログラム
- (5) 「インター・キャンパス構築」プログラム

「超表象デジタル化」研究(研究組織: 超表象デジタル化研究ユニット)

- (1) 研究資料および成果のデジタル・データベース化
- (2) 研究全体を紹介するプラットフォーム構築

なお、プロジェクト全体の活動は統合研究ボードが統括しているため、統合研究ボードの活動報告を参照いただきたい。

(研究代表 羽田功)



## 統合研究ボード

ボード代表者 羽田 功(経済学部)

### . 研究の概要

リベラルアーツ教育(教養教育)モデルのメタ理論を構築する。

モデル実現のためのキャンパスデザインを行い「21世紀型キャンパス基本構想」を策定する。

プロジェクト全体の活動を統括し、最終的な成果を取りまとめる。

国内外の共同研究機関との連携をはかる。

### . 2005年度活動報告

#### (1) プロジェクト全体説明会

第1回: 2005年9月29日(木)18:30 ~ 20:45 プロジェクト室 101/102

- ・プロジェクト参加者に対するプロジェクト全体の説明
- ・今年度のスケジュール
- ・全体予算説明
- ・質疑

第2回: 2005年11月22日(火)18:15 ~ 20:15 プロジェクト室 101/102

- ・プロジェクト全体の説明(再)
- ・会計処理の基準説明
- ・HRP(日吉リサーチポートフォリオ)参加について
- ・外部評価について
- ・質疑

#### (2) 統合研究ボード会議

第1回: 2005年10月7日(木)16:30 ~ 20:30 来往舎 応接会議室

- ・プロジェクト全体の枠組・目的・指針について
- ・会計処理の基準について
- ・予算(案)について
- ・その他

第2回: 2005年10月24日(月)18:30 ~ 22:00 来往舎 応接会議室

- ・各ユニットの活動報告
- ・プロジェクトの基本的方向性に関する議論

第3回: 2006年1月31日(火)13:00 ~ 15:30 来往舎 応接会議室

- ・各ユニットの活動報告
- ・2006年度予算について
- ・新規研究課題について
- ・その他

第4回: 2006年3月9日(木)13:00 ~ 17:30 来往舎 応接会議室

- ・各ユニットの活動報告
- ・今年度予算の執行状況について
- ・来年度予算について
- ・研究アシスタントの任用と業務内容について
- ・2005年度活動報告書の作成について
- ・2005年度活動報告会の開催について
- ・2006年度の活動スケジュールについて
- ・その他

#### (3) 研究環境の整備

##### 人事:

・事務処理の円滑化をはかるためプロジェクト専属の嘱託事務員(有期)の採用を行った。

##### 機材等:

・研究活動の活性化をはかるために以下の機材を購入・設置した。

65型液晶モニター(来往舎 応接会議室)

サーバー2台(来往舎 プロジェクト室 207)

サーバー1台(三田 ITC 本部 来往舎に移設予定)

3次元位置測定装置・立体視プロジェクター・ワークステーションセット(第8校舎日吉心理学教室)

映像編集機一式(来往舎 プロジェクト室 208)

ハイビジョン映像編集機一式(来往舎 プロジェクト室 210)

### . 2006年度活動計画

2005年度に引き続き、4つの課題に取り組んでいく。特にプロジェクト全体のフレームであるリベラル・アーツ(教養教育)モデルのメタ理論をより詳細な形で構築し、各ユニットの研究成果をそこにはめ込んでいくことが今年度の最大の研究目的である。そのためには統合研究ボードと各ユニット間のこれまで以上の連携をはかる必要がある。そこで、プロジェクトの全体を見渡し、それぞれの研究活動の進展状況を把握しながら、それを全体の活動にフィードバックさせるための「つなぎ役」としての研究員を任用する予定である。また、国内外における最新のリベラル・アーツ教育(教養教育)の実態調査、共同研究機関との研究会、シンポジウムの開催も想定している。

#### 【研究メンバー】

羽田 功(経) 佐藤 望(商) 近藤明彦(体研) 熊倉敬聡(理工) 境 一三(経)

## コンテンツ研究ユニット

ユニット代表者 近藤明彦（体育研究所）

### ・研究の概要

コンテンツ研究ユニットの目的は、教養教育の新たなモデル構築にあたり、教養教育モデルを構成するコンテンツの開発研究とその統合理論研究を行う。本ユニットでは以下の4つの課題を取り上げ、それぞれの課題についてコンテンツそのものを吟味するとともに、新たな教養教育を構築する際にその指針となるべきモデルを提示することを目的としている。

- (1) 導入教育プログラム「知との遭遇」研究グループ  
大学入学初頭の導入教育に関する問題の吟味とその教育プログラムを開発する。
- (2) 温故知新」型教育プログラム「日本の教養」研究グループ  
伝統的な「知」の体系に関する統合研究と実践を行う。
- (3) 身体知」教育プログラム「心と体と頭 経験と理論の融合論」研究グループ  
体験・経験型教育プログラムの開発研究とその実践を行う。

## (4) 現代における危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム研究グループ

さまざまな現代的課題に対応した融合的教育プログラムの検討と実践を試みる。

### ・2006年度の研究計画

2005年度に行った各研究グループの成果を基に意見交換を行うとともに、各グループ間の関連性について検討を加える。各研究グループは新たな教養教育を構築する際にその指針となるべきモデルの構築を試みる。

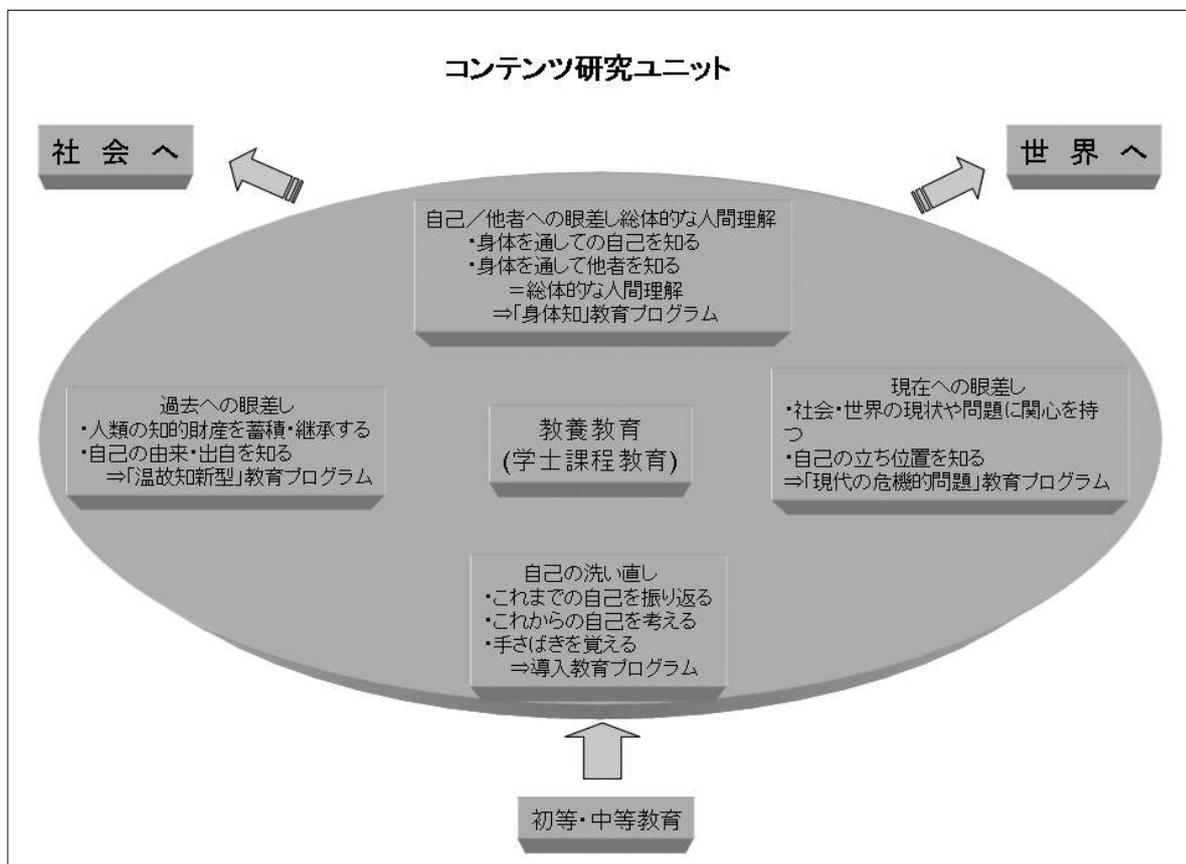
### ・2005年度活動報告

## (1) 導入教育プログラム「知との遭遇」研究グループ

研究代表者 横山千晶（法学部）

### ・研究の概要

このプロジェクトでは、大学入学時の学生を、大学



で提供される新たな知の体系にいだないつつ、なおかついかにして新たなアイデンティティを確立させるのか、という方法の模索を研究テーマとしている。大学に入った学生はそこから社会の一員となっていく。その導入の基盤を、「生活」、「教育」、「社会貢献」という3つの土台から見据えることが研究の主眼である。

・2005年度活動報告

2005年度は、以下の点から導入教育のあり方を考察した。

- ・高校までとは異なるカリキュラムのあり方
- ・キャンパスという空間のありかたと学生への周知
- ・その空間で繰り広げられるコンテンツと教員・学生の関係の構築
- ・学生がさまざまな「経験」をし、「新たな知の世界を切り開く門」としての教育機関のあり方
- ・研究や生活に対するマッピングの場としての教育機関のあり方

現在アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダなどでは、First-Year Experience の名のもとに、さまざまな導入教育を推し進めており、研究の歴史も築かれつつある。そこで2005年度はこの先駆的な試みを研究するために、実地調査と勉強会を行った。

以下、具体的にその内容を述べていく。

#### 【調査】

1. 2006年1月2日～5日(韓国)
  - ・成均館大学校学部大学(1、2年次共通カリキュラムの調査)
  - ・延世大学校学部大学(1、2年次共通カリキュラムの調査)
  - ・ソウル国立大学校 Center for Teaching and Learning (教育および学習サポート体制についての調査)
2. 2006年1月22日～27日(イギリス)
  - ・トインビー・ホール(初期のサービス・ラーニングの調査)
  - ・ホワイトチャペル・アート・ギャラリー(芸術導入教育の歴史と実施の調査)
  - ・ジェフリー・ミュージアム(芸術導入教育の実施の調査)
3. 2006年3月1日～4日(オーストラリア)
  - ・シドニー国立大学(自然科学系統の導入教育の調査、および学部共通科目の調査)
  - ・ニュー・サウス・ウェールズ国立大学(ピア・ラーニングの調査、およびFD・授業評価システムの調査)

#### 【研究会および学会参加】

1. 学会発表

International Conference on “Liberal Arts Education in China, Japan, and Korea: Challenges and Prospects”(開催日：2005年4月14日～15日、ソウル国立大学校)  
Chiaki Yokoyama “Critical Thinkers: Enhancing Japanese Students’ Experience of Lectures through Small-Group Seminars”

発表日：2005年4月14日(木)

現在教養研究センターで導入教育カリキュラムの一貫として行われている実験授業「アカデミック・スキルズ」立ち上げの意義と内容を紹介したもの。

#### 2. シンポジウム参加

日吉リサーチ・ポートフォリオ・シンポジウム「ハイパー・リベラルアーツ - 新しい教養教育を考える - 」  
横山千晶「大学への架け橋　そもそも大学は何をする場所なのか」

開催日：2005年12月21日(水)

学術フロンティアにおける「導入教育プログラム」プロジェクトの目的と意義を紹介。

#### 3. ディスカッション・セミナー

「導入教育の役割とコア・カリキュラムの構築　1年次教育をどうとらえるか」

開催日：2006年3月17日(金)

講師：ヒョン・G・リュウ教授(リード大学、アメリカ合衆国)

ここではアメリカ合衆国での導入教育のあり方と、その意義について考察すると同時に、韓国・中国・日本の高等教育への応用の可能性とそこで浮かび上がる問題点について議論が行われた。

#### 4. 研究報告会

「平成17年度超表象デジタル研究プロジェクト研究成果報告会」

横山千晶「『知との遭遇』 導入教育カリキュラムの調査」

開催日：2006年4月22日(土)

2005年度の活動報告とその意義、今後の研究・調査予定について報告したもの。

・2006年度の研究計画

#### (1)導入教育・接続教育の調査・研究

・導入教育・接続教育実施例の調査

4月28日 小樽商科大学の調査

・導入教育に関する国際学会への参加と研究成果の発表

International Conference on First-Year-

Experience(7月24日～27日、トロントにて)

・一貫教育校との提携

(2)ピア・メンタリング・システムについて

・国内外のピア・メンタリング・システムの研究  
・メンターシップの歴史研究の研究会開催

マイケル・ベル教授(ウォーリック大学、イギリス) 6  
月開催予定

(3)導入教育のカリキュラム作り

・所員のネットワーク作り  
・研究成果に基づいた新しい導入教育のカリキュラム  
構築

【研究メンバー】

横山千晶(法) 武藤浩史(法)

【研究協力者】

ヒョン・G・リュウ(リード大学、アメリカ合衆国)

(2)「温故知新」型教育プログラム「日本の教養」  
研究グループ

研究代表者 岩波敦子(理工学部)

・研究の概要

「温故知新」型「日本の教養」プロジェクトでは、既存の「知」の体系や知的財産がどのように形成され、受容・蓄積・継承されてきたのかについて、1)歴史的考察を行い、2)現状を見極め、3)提言することを目指している。

・2005年度活動報告

活動が始まった2005年度は、研究領域を超えたシンポジウムを企画し、問題点を共有する作業を通じて、新たな知のネットワーク構築の可能性を探った。まず第1回目のシンポジウムとして、「専門教育から見た教養教育の現状と課題」をテーマに、理工学、哲学、医学専門教育の現場から見た、現在の日本の教養教育の現状について問題点を明確にした。第2回シンポジウムは、「法の中の教養/教養の中の法」をテーマとし、技術知に偏向しかねない法律分野における「教養性」の問題を多角的に論じた。これらのシンポジウムを通じ、高等教育の現場での「教養」をめぐる諸問題を、専門分野の枠組みを超え、共有することができた。

第1回シンポジウム

「専門教育から見た教養教育の現状と課題」

2006年1月7日(土)13:00～17:00、来往舎101/102

報告者:

小島和貴(中部学院大学:医療行政史)日本の医学教育の導入過程と教養教育 医療行政史の視点から  
河野哲也(玉川大学:科学哲学)日本の哲学教育から見た教養教育 - 中等教育以降  
前野隆司(理工学部:ロボット工学)日本の工学教育から見た教養教育 技術者倫理教育の視点から  
司会:田上竜也(商学部・本研究グループメンバー)

第2回シンポジウム

「法の中の教養/教養の中の法」

2006年3月15日(水)13:00～17:00、来往舎シンポジウム・スペース

報告者:

六車明(慶應義塾大学大学院法務研究科)法律実務と教養  
大平哲(経済学部)経済政策の現場と法  
北村隆憲(東海大学法学部)法学教育から見た教養教育:法と日常性との交差の視点から  
司会:岩谷十郎(法学部・本研究グループ研究協力者)

このシンポジウムで得られた研究成果は、それぞれ報告書の形で刊行している。

・2006年度の研究計画

2006年度は、2005年度の活動を通じて得られた知見を出発点に、高等教育の現場での教養教育の問題点と課題を克服する、具体的カリキュラムを構築したいと考えている。2005年度に開催された2度にわたるシンポジウムで、1)現在の高等教育が、蛸壺式で、相互に密接に関連した体系的カリキュラムが十分構築されていないこと、2)他者に共感する能力、「他者の眼差し」で課題に取り組む能力が、現代の学生に欠けているという知見を共有することができた。2006年度はふたつの柱の下、活動を計画している。1)まず、学塾としての慶應義塾の伝統の中で「教養論」がどう論じられてきたかを探ることを目指して「慶應義塾における教養論」をテーマにシンポジウム・勉強会を計画している。2)また、経験知獲得の場として、現在その重要性が再認識されつつあるフィールドワークを、高等教育のカリキュラムとしてどう構築していくべきなのか、具

体的試みを検証しながら、その可能性を探っていきたい。

#### 【研究メンバー】

岩波敦子(理工)、田上竜也(商)、佐谷眞木人(恵泉女学園大学人文学部)

#### 【研究協力者】

岩谷十郎(法)

(3)「身体知」教育プログラム「心と体と頭 経験と理論の融合論」研究グループ  
研究代表者 近藤明彦(体育研究所)

・研究の概要

#### 【目的】

身体知教育・研究の対象は、身体そのものではなく、身体による行動(Behavior)と考えられる。その場合の身体は、「自己」に立脚する身体であるから、身体知はモチベーションとしては自発的、方法論としては体験的でなければならない。

教育においてはモデルが、研究においてはアーカイブが欠かせない。教育は、まず対象にモデルを示すこと、研究は対象となるデータを収集することから始まるのが自明のことと考える。

公的援助を受けるプロジェクトにおいては、成果の公開と共有が本来的に課された責務であることは言うまでもない。また、この共有の在り方そのものが研究成果となる。したがって、本プロジェクトは以下の三点について研究を展開する。

1. 教養教育としての身体知教育モデルケースの構築
2. 教養研究としての身体知教育実践の蓄積
3. 研究成果としての身体知教育の公開・共有

#### 【期待される成果】

身体知教育・研究は、従来の教育効果の刷新と、個別・具体的な問題と理論との融合 教育・研究の臨床性への回帰 を、その問題意識の出発点としていられると考えられる。この問題意識の根底には、個・集団のひきこもり化(自己満足的表現の横行)、知の膠着化(広がってゆかない知)、生の弱体化(他者・異環境への対応の危うさ)への危機感があると思われる。このプロジェクトによって、自ら置かれた「大学」という場の

境界を再検討すること、他者への公開と共有を通して新たな身体知教育についての可能性が得られることが期待される。さらに、共有・公開によって、自発的動機付けを促し、新たに自主企画の実現をサポートする効果が期待できる。

1. 「大学の境界」についての示唆が得られること。
2. 身体知教育の蓄積と公開についての示唆が得られること。
3. 教育における身体知の可能性についての示唆が得られること。
4. 自発的動機付けを促し、自主企画の実現が促進できること。

#### 【方針】

第一に、新たなイベントの実践よりも、現在進行中の教育実践および過去に行った身体知教育の収集、整理、蓄積を通して上記目的を達成する。第二に、モデルケースの構築と蓄積に不足した部分を見極めた上で新たな可能性に向けての模索と実験を行う。

・2005年度活動報告

研究会第1回：2005年12月14日18時～20時、来往舎

研究会第2回：2006年1月11日18時～20時、来往舎

研究会第3回：2006年2月28日14時～17時、来往舎

(研究会第4回：2006年4月7日1時半～16時半、来往舎)

(研究会第5回：2006年4月25日18時15分～、来往舎)

・2006年度研究計画

A)実践モデルの構築(1～4は既に進行中)

1. 実践モデル : 大野一雄舞踏公演〔先駆的实践例および蓄積例として〕
2. 実践モデル : 映画上映会「アリア」〔自己の作品を専門家の検証・協力をうける例として〕
3. 実践モデル : パフォーマンス「色即是空」〔インターユニバーシティ的學生間の協力と三年間にわたる成長の記録として〕
4. 実践モデル : 日吉エイジ:〔地域連携の例として: 大学 + 学生 + 地域〕
5. 実践モデル : 演劇「能楽公演」〔即興的徒弟体験の例として: 教員 + 観世会(学生) + 観世後援会(先輩) + パフォーマー(専門家)〕

6. 実践モデル :文化としての Walking :〔授業展開の例として(体育)〕

7. 実践モデル :音楽教育での展開:〔授業展開の例として(音楽)〕

8. 実践モデル〔学内行事のアーカイブとしての「宝箱」〕: HAPP 公募行事 + 学内行事

(B)共有:公開の準備

1. 公開範囲の検討
2. 公開方法の検討
3. 著作権処理の検討

#### 【研究メンバー】

近藤明彦(体研) 小菅隼人(理工)

【研究協力者】羽田功(経) 小瀧昭夫(経) 林栄美子(経) 石井明(経) 横山千晶(法) 内海雄介(早稲田大学大学院国際情報通信研究科) 内田伸哉(慶應義塾大学大学院理工学研究科)

(4a)「現代における危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム「信じる? - 現代の民族・宗教問題」

研究代表者 湯川 武(商学部)

#### . 研究の概要

本研究グループは、本プロジェクト全体の中心的な課題の一つである、「知」の連鎖体系を基盤とした一貫したシステムチックなリベラル・アーツ教育(教養教育)プログラムの構築(コンテンツ研究ユニット)の一翼を担うグループである。そのユニットの中でも、現代の危機的問題の理解と解決のために、既存の「知」の体系や知的財産をどのようにして組み直し、これを発展・応用させていくことができるかということ課題とする「融合複合型表象研究(発展・応用型の「学び」)」に属している。

さらに、本グループはさまざまな「危機的問題」のうちでも、特に現代の世界できわめて重大な問題となっている「民族」「宗教」を取り上げて、前述のような展望の下に、具体的なコンテンツを検討するとともに、教育的な効果の高い実践的プログラム(授業モデル)を開発することを研究の目的としている。

. 2005年度活動報告

本研究グループを構成する3名の本務の都合と日程の関係もあり、研究会を開催することはできなかったが、電子メール等による連絡や意見交換を繰り返した。それらを通じて、2005年度には以下のような成果を得た。

(1)基礎文献データ作成をする準備としての文献情報の収集

既存の「知」の成果を踏まえつつ、現代にふさわしい新しい展望を切り開いていくという観点から、これまで蓄積されてきた知的成果を評価し取捨選択することの基礎作業として、ある種の網羅的な文献リストを作る必要がある。

2005年度は各種文献目録や検索データベースなどに当たりながら、また関連する各分野の基本文献も参照しながら、基本文献リストの作成を始めた。現在までに数百点がリストアップされているが、今後は全体数をさらに充実させるとともに、内容的にも取捨選択しながら完成度を高めていく予定である。

(2)具体的なコンテンツの検討の開始

上に述べたような実践的プログラム(授業モデル)を構築するためには、分かりやすく言うならば、まず「何を、どう教えるのか」をよく考えておかなければならない。そのことを本格的に検討するための準備として2005年度には以下のことを始めた。

本研究グループのテーマである「民族」と「宗教」は、現在の大学ではどのように教えられているか。国内のいくつかの主要な大学の資料(講義要綱にあたる資料や各大学のホームページなどからアクセスできる類似の資料)をとり寄せて検討を始めた。現在はまだ資料整理の段階であるが、上記二テーマについては「政治学」「文化人類学」「宗教学」などの既存のディシプリンの範囲内で扱われており、現代の複合的な問題として取り扱われることは、いくつかの例外を除いてはほとんどないと言える。

上記 とならんで、それぞれの授業の形態も調べているが、従来型の講義形式が多数を占めており、それ以外は少人数のセミナー形式あるいはオムニバス講義であり、授業形態についてはこれら以外も含めて検討する必要がある。

高等学校までの教育の各段階でどのような教育がなされているかについての資料の収集。各段階の学習指導要領を収集し、その内容の整理を始めた。大学生に何を教えるべきかという点では、それ以前の学校

教育の各段階で何を学んできたかを知っておくことは必須と考え、さらに調査・分析を進めていく方針である。

#### 活動企画の立案と準備

どのような視点で何を取り上げるべきか、ということについてはグループを構成するメンバーの意見や考え方を集約中であり、それに基づいて2006年4月以降の研究会・シンポジウムなど具体的な成果につながる活動を企画している。

#### 研究成果の授業への反映の方法

研究成果を授業にどう反映させるかについての検討の必要性が強く認識された。

本研究グループの2005年度の活動は準備的なものに集中しており、具体的な成果が提示できるのは2006年度からということになる。

#### . 2006年度の研究計画

- (1) 研究会・シンポジウムの開催：テーマとしては「学校現場の教育的取り組み」「大学における『民族・宗教』にかかわる教育の現状と問題点」「日本および世界における『民族・宗教』への関心のあり方」「『民族・宗教』を見るさまざまな視点」などを予定している。
- (2) 教育実践の見学：参考になるような授業の見学とその後の討論会
- (3) さまざまな民族・宗教との出会いの場を大学キャンパス内につくるための準備作業
- (4) 具体的なカリキュラム案の作成
- (5) 関連文献データベースと基本文献リスト(学生向け)の作成

(1)を踏まえたうえで秋学期中に(4)の作業を完成する。(2)(3)はそれと並行して展開するが、現在、国連大学とこのことに関連して連絡を取り始めた。(5)のうち学生向けの基本文献リストは夏休み終了までに初稿を完成させる。

#### 【研究メンバー】

湯川武(商)、白杵陽(日本女子大学教授)、長堀祐造(経)

(4b)「現代における危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム「先端をキャッチ！－現代科学の行く先を考える」

研究代表者 鈴木晃仁(経済学部)

#### . 研究の概要

リベラル・アーツ教育(教養教育)の一つの重要な柱は、自然科学系と人文社会系、いわゆる理系の学問と文系の学問の連結を考えることである。そのために、日吉キャンパスでは、「科学史」「病気の歴史」などに加えて、「生命の教養学」「身体/感覚文化」などの科目を導入して、さまざまな試みがされている。このユニットにおいては、学生の興味をひく、理系の知と文系の知を総合しないと考察できないような主題を選び、その主題に関してインタラクティブな教育ができるような科目と教材を構築することを目標にして、まずは主題の選定と、教材の開発の方向性を議論した。

#### . 2005年度活動報告

##### ミーティング(鈴木・青木)

2006年2月1日 主題の選定と教材の開発について

・鈴木と青木のそれぞれの専門分野を生かして、鈴木は現代の医学の問題から、青木は現代の物理学の周辺からトピックを選ぶこととなった。鈴木からは、AIDSの疫学と対応の問題が、青木からはID(Intelligent design)の問題が候補に上がった。

・教材の開発の方向については、学生が作業することができる資料(読み物、画像、データなど)を、専門家と相談しながら収集・構築することとなった。具体的には、AIDSの国別・地域別の疫学的なデータ、それぞれの地域の報告書、対策と医療研究の発展のまとめ、新聞記事や患者の手記などである。

・これらをまとめて、どのような魅力的な教材にできるかということが話し合われた。学生が、パワーポイントや動画などを作ることができるような仕組みが示唆された。

##### 学会発表

・2006年1月25日(英国ダラム大学)

Centre for the History of Medicine and Disease  
Akihito Suzuki, "Telling the Story of Male Madness: The Nervous Breakdown of Victorian Labouring Man"

・2006年1月26日(英国ダラム大学)

Centre for the History of Medicine and Diseases

Akihito Suzuki, "Body Image and Therapeutic Choice: Evidence from Modern Japan"

. 2006年度の研究計画

2006年度は2005年度の土台を踏まえ、以下の点に焦点を絞って研究を進める。

教材の方向性を定める

諸外国における、科学技術・医学系の内容に関して、文系の学生の目を向ける取り組みを参考にして、教材の方向性を定める。

教材を実際に開発する

専門的な知識の供与を仰ぐ研究者を人選し、教材用の資料を提供してもらい、打ち合わせを行って、資料を選択する。

【研究メンバー】

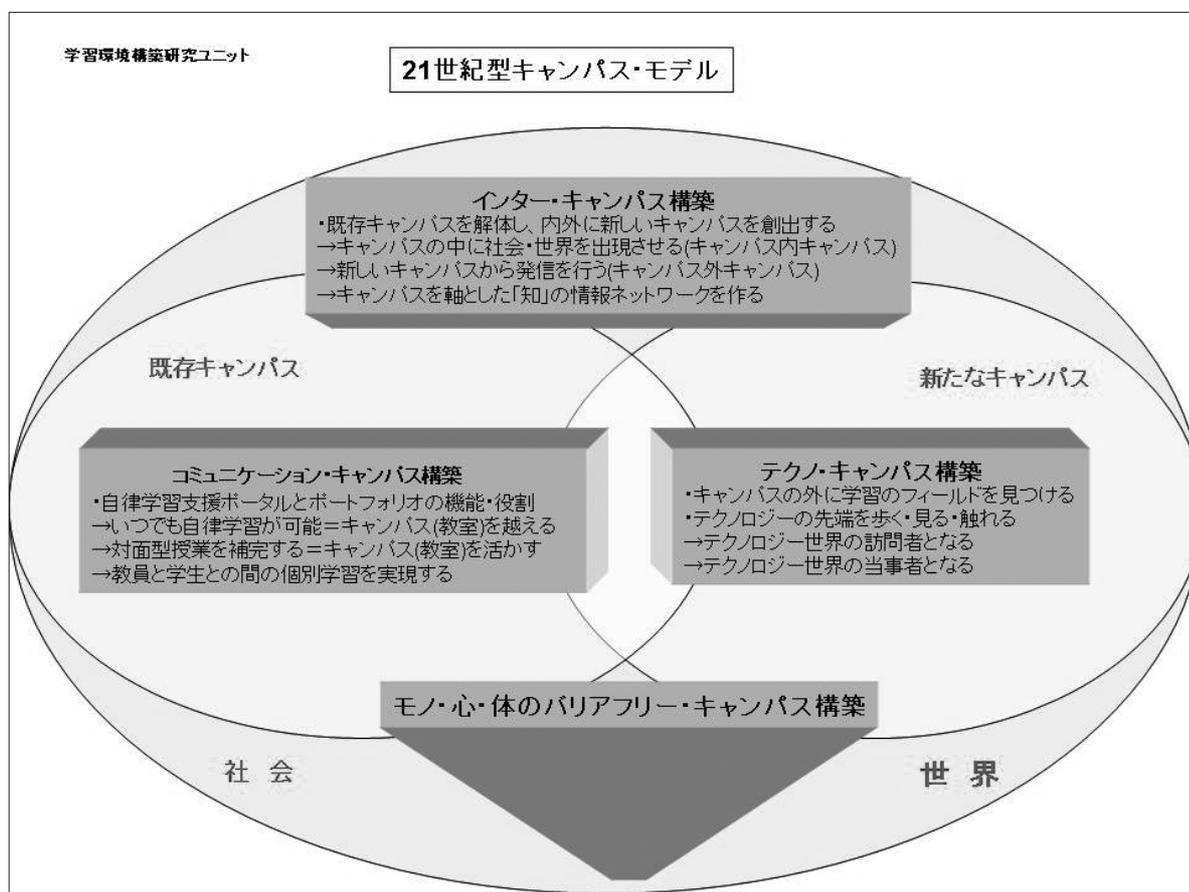
青木健一郎(経) 鈴木晃仁(経)

## 学習環境構築研究ユニット

ユニット代表者 熊倉敬聡(理工学部)

. 研究の概要

本ユニットの研究目的は、教養教育の新たなモデル構築にあたり、そのコンテンツが最大限の意義を発揮できるような学習環境としての大学・キャンパス像を描き出すこと、また大学・キャンパスが内在させる「学びの場」としてのさまざまな可能性、コミュニケーションの潜在的多様性を探ること、これまでにない大学・キャンパスを構想することにある。本ユニットでは、以下の4つの研究プログラムが展開されている。「バリアフリー・キャンパス構築 心・身体・頭・モノのバリアフリー」 「コミュニケーション・キャンパス構築 自律的学習支援ポータル・プログラム」 「テクノ・キャンパス構築 秋葉原クロスフィールドと結んで」 「インター・キャンパス構築 解体・逆転・再生の入れ子型キャンパス」



### . 2005年度活動報告

- (1)「テクノ・キャンパス構築研究グループ」主催研究会(2005年11月4日、秋葉原クロスフィールド)
- (2)「コミュニケーション・キャンパス構築研究グループ」主催研究会(2005年12月22日、日吉キャンパス来往舎)
- (3)「バリアフリー・キャンパス構築研究グループ」主催研究会(2006年2月10日、東京大学先端科学技術研究センター)

### . 今後の展望

2005年度に行った、ユニット内各グループ間の意見交換を背景として、2006年度は、グループ間のインターアクションをさらに活発化し、さらに統合研究ボードと密な連携を図りながら、このユニットの最終目標である「21世紀型キャンパス基本構想」の青写真を練り上げていきたい。そのためには早急に、キャンパスの現状調査と問題点の抜本的な洗い出し、キャンパスが内在させている種々の可能性についての多角的な検討を行いたい。

### (1) バリアフリー・キャンパス構築

研究代表者 増田直衛(文学部)

#### . 研究の概要

本研究の目的は、バリアフリーの観点から学習環境の構築に関する実践的な研究を実施することである。ここでは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由等の身体障害のある学生や教職員のみでなく、対人関係やコミュニケーション等に障害を感じている学生/教職員も含めた広義のバリアフリーを実現するための実践的な研究を行う。また、バリアを軽減するための具体策の分析を通して、バリアという現象の理解やその生成メカニズムについて明らかにする。さらに、バリアフリーに関するキャンパス内外のさまざまな研究や教育活動との連携も試みる。2005年度は、他大学等におけるバリアフリー・キャンパスに関する研究や教育活動等の調査、バリアフリー教育に有効だと考えられるシミュレーションシステムの構築に関する予備研究を行った。

#### . 2005年度活動報告

##### (1) 英国の障害学生支援に関するミーティング

2005年11月29日、東京大学先端科学技術研究センターにて、EA Draffan 研究員(マンチェスター大学研究員)と Paul Blenkhorn 博士(マンチェスター大学教授)と英国における障害学生支援について情報交換を行った。

##### (2) カンファレンスでの情報収集

・ Conference on Assistive Technology and Augmentative Communication(2005年12月2日~12月4日)

他大学等におけるバリアフリー・キャンパスに関する情報収集

##### (3) 米国の障害学生支援に関するミーティング

2005年12月5日、東京大学先端科学技術研究センターにて、コンピュータを利用した障害のある人の会話研究の第一人者であり Minspeak 法と呼ばれる符号化法の開発者でもある Bruce Baker 氏(Semantic Compaction Systems 社社長)と米国におけるコミュニケーション障害のある学生の支援に関する情報交換を行った。

##### (4) 見学会・研究会

・ 2006年2月10日(東京大学先端科学技術研究センター)16時~18時

a) 先端研バリアフリープロジェクト(福島智研究室)

b) 東京大学バリアフリー支援室

- c) 五感情報通信プロジェクト( 廣瀬通孝研究室)
  - d) 人間情報工学プロジェクト( 伊福部達研究室)
  - e) 東京大学領域創成プロジェクト( 中邑賢龍研究室)
- (5) シミュレーションシステムの構築に関する予備研究  
障害のある状況を体験的に理解するためのシミュレーションシステムを構築するために、必要なパーツを購入し、システム化に関する予備研究を実施した。

. 2006 年度の研究計画

2006 年度は 2005 年度の土台を踏まえ、以下の点に焦点を絞って研究を進める。

(1) 発達やコミュニケーションに障害のある学生の支援に関する研究

- a) 高機能自閉症等のコミュニケーションに障害のある当事者と専門家によるシンポジウムを実施する。
- b) 高機能自閉症等のコミュニケーションに障害のある学生の事例調査を実施する。

(2) 障害の理解と支援環境の整備に関する研究

- a) 障害を正確に理解するための手法に関する調査を実施する。
- b) 障害のある教職員の支援の実際に関する調査を実施する。
- c) キャンパスのバリアフリーチェックを実施する。

(3) バリアフリーキャンパスシミュレーションに関する研究

- a) バリアを体験的に理解できるシミュレータを試作する。

【研究メンバー】

増田直衛( 文 )、中野泰志( 経 )

【研究協力者】

中邑賢龍( 東京大学先端科学技術研究センター )、伊福部達( 東京大学先端科学技術研究センター )

(2) コミュニケーション・キャンパス構築

中山 純( 経済学部 )

. 研究の概要

この研究は情報技術を活用して、成果約束型の語学授業を実現することにある。そのまず第一歩として経済学部のドイツ語授業を対象にして、研究のプラットフォームとなるプロジェクトを組んだ。このプロジェ

クトには学習過程の透明化、評価の透明化、学習歴の透明化という3つのねらいがある。教える側と教わる側が、この3つの透明化を通して学習目標への共通認識を持つことで、当初の目標の実現を図る。

学習過程の透明化と評価の透明化は、学習プログラムであるカリキュラムや、評価のプロセスを web 上のポータルサイトで開示することによって行う。学習者の学習記録と評価記録を掲載した記録全体である履修ポートフォリオも同じサイトに掲載して、これを土台にして学習計画のアドバイス、学習成果の不具合についての分析などを行っていく。履修ポートフォリオを載せるポータルサイトのコンテンツは教育理念、履修ガイド、学習プログラム、辞典や参考書の紹介などの静的コンテンツと、シラバス、語彙、試験、出欠、成績などの動的コンテンツで構成されている。

. 2005 年度活動報告

学術フロンティアに採択された9月以降、ポータルサイトの静的コンテンツではトップページ( 日独 )、教育理念、コース別カリキュラム( 1 年用 )、語彙データベース( ポートフォリオ用 )、Cando リスト( ポートフォリオ用 )、文法項目リスト( ポートフォリオ用 )、サイトポリシー用の各画面および動作環境を構築し、動的コンテンツでは主に履修ポートフォリオ関係のログイン画面、ポートフォリオサイト、履修ポートフォリオ検索画面、履修ポートフォリオ検索( 一覧 )、学事、試験、成績、シラバス、語彙の各画面および動作環境を整備した。

また管理画面関係として試験登録、語彙登録、シラバス登録、出欠・習得項目登録、各種データ取り込み口( CSV データ )、トップページ記載記事(Pickup)登録の各画面の制作を終えた。

2006 年3月に Web と Data サーバの設置、設定を終え、学生の履修登録情報の整備が終わる6月から試運転に入る。

. 2006 年度の研究計画

サイトの運用を開始して数年経てば、蓄積されたデータの分析を通して、学年単位での授業の進行状況や共通の学習上の弱点などが明らかになってくるだろう。必要な補助教材の形や内容も明確になってくる。これらの学習資料の投入の場面、時期、分量などを明らかにした上で、次のステップである LMS を中心とした本格的な e ラーニング環境の構築を考えていく。

【研究メンバー】

中山 純(経)、朝吹亮二(法)、千田大介(経)

### (3) テクノ・キャンパス構築 武山政直(経済学部)

#### . 研究の概要

「テクノキャンパス構築」プロジェクトは、先端的な情報通信技術(ICT)の活用を前提に、都市や地域をフィールドとした各種の体験的学習プログラムの可能性について検討を行うことを目的とする。特に、都市の経済・文化・歴史を学ぶモバイル・フィールドワーク、建築・デザインを学ぶためのツアーの実施を行い、企業や公共団体等との連携により、デジタル教材の制作を行うなど、各種のプログラムの具体的な内容や期待される効果について明らかにする。2005年度の活動は、特に2006年度にデジタルキャンパスに向けた実証実験を行うための準備期間と位置づけ、フィールド視察、資料収集、利用を予定する情報機器の評価等の活動が中心となった。

#### . 2005年度活動報告

2005年11月の秋葉原クロスフィールド見学：

NPO 法人産学連携推進機構理事長の妹尾堅一郎氏より、秋葉原クロスフィールドを中心とする実証実験や街づくりの計画についてのレクチャーを受け、将来のテクノキャンパス教育プログラムの可能性について意見交換を実施。

2006年2月10日(月)に東京大学先端技術研究所を見学：

バリアフリー等に関する研究プロジェクトの紹介やデモンストレーション。

インターンシッププログラム関連資料収集：

インターンシッププログラムの実行に向け、各種インターンシップに関するガイドライン(文部科学省)等の資料を収集した。

フィールドワーク用機器の評価：

ユニバーサルデザイン調査、観光案内、街づくりコンテンツ等への応用のため、秋葉原街区フィールドワーク用のモバイル情報機器についての利用評価を実施した。

. 2006年度の研究計画

2006年度は研究の2年目ということで、東京都内の街区や地方都市をフィールドとした体験型授業の内容について企画策定を行うことが主な活動の内容となる。そのため、

研究会(ゼミ)、自由研究セミナー等の授業を通じた、テクノキャンパス教育プログラム内容の検討(体験型学習事業に参加する学生へのオリエンテーションやNPO 法人産学連携推進機構との共同研究会の実施)

上記授業履修者を参加者とした、教育プログラム開発のためのパイロット授業の実施(7月までにパイロット授業の内容を企画検討し、夏休み期間を利用して実施する予定)

パイロット授業の実施によって判明した内容や課題の整理、テクノキャンパス教育プログラムの企画構想づくり、

という3つのステップを踏まえた研究活動を計画している。

#### 【研究メンバー】

武山政直(経)、長田進(経)

#### 【研究協力者】

妹尾堅一郎(NPO 法人産学連携推進機構理事長)

### (4) インター・キャンパス構築 研究代表者 熊倉敬聡(理工学部)

#### . 研究の概要

地域、社会、大学が何を提供しあえるのか、また何を共有できるのかを探ることで、地域と大学、社会と大学が相互浸透しあい、やがて「内と外」が渾然一体となるような新たな関係性の実現、すなわち21世紀型インター・キャンパスを生み出すための総合的かつ多角的なプログラムの作成を目指す。インター・キャンパスのデザインやプロデュースのできる人材育成が期待できる実践型・「身体知」教育系のプログラムである。

実際には、三田通り商店街振興組合と協力し、三田キャンパス周辺に、上記コンセプトに基づいた新たな「学生街」の創出を目指す。大学と地域・社会とのインタラクションの結節点となるべきサイトを構築し、それを通して、さまざまな教育・研究プログラムを展開する。

#### . 2005年度活動報告

(1)研究会 (2005年6月16日・三田キャンパス)

講師：梶昇(アーティスト)



講師 橋昇：アーティスト

【研究メンバー】

熊倉敬聡（理工学部）

【研究協力者】坂倉杏介（デジタルメディアコンテンツ統合研究機構）、岡原正幸（文）、手塚千鶴子（国際センター）、真壁宏幹（文）

(2)研究会（2005年6月23日・三田キャンパス）

講師：内藤礼（アーティスト）

(3)研究会（2005年10月29日・三田通り商店街振興組合事務所）

講師：岩本唯史（建築家）

(4)研究会（2005年12月10日・春日神社社務所）

講師：小瀧昭夫（慶應義塾大学経済学部教授）

(5)研究会（2006年1月20日・春日神社社務所）

講師：アフターブ・セツ（慶應義塾大学グローバルセキュリティセンター所長）

(6)研究会（2006年3月18日・三田通り商店街振興組合事務所）

三田通り商店街振興組合との共催

(7)ワークショップ（2006年3月25日～26日・港区芝5丁目「M-House（仮称）」）

講師：井出玄一（地域コンサルタント）

・2006年度の研究計画

上記2005年度の研究会・ワークショップ、ならびに三田通り商店街振興組合との協働により、三田の地域住民・商店主との交流がかなり活発化した。そして、年度末に、念願の研究活動拠点＝上記M-House（仮称）を取得する準備が整った。それを背景として、2006年度は、まずその活動拠点の物理的・組織的・メディア的・人的環境の整備に努め、同時に運営組織、活動概要を策定する。具体的には、運営組織として、本プロジェクト研究メンバー・研究協力者、塾内外の学生（留学生を含む）、地域住民・商店主らと協働組織を作り上げる。また、活動としては、この拠点を中心に行われる教育・研究プログラムの策定、WEBサイト・ネットTVなどの「小さいメディア」の制作、まちづくり・商店街活性化のさまざまな方策、などを展開していく。

また、ユニット内あるいは学術フロンティア内の他のプロジェクトとの有機的連携も試みたい。

## 超表象デジタル化研究ユニット

ユニット代表者 境 一三（経済学部）

### ・研究の概要

本ユニットは、超表象デジタル化研究プロジェクトを構成するユニット間の連携を密にし、それらを有機的に統合して、プロジェクトの活動全体を円滑かつ積極的なものとするために、主に技術的な支援を行うことを目的とする。その活動は、統合研究ボードと緊密な連絡を取りながら行われている。

具体的には、本プロジェクトのためにhydiと呼ばれるハイパー・デジタル・インターフェイスを、Content Management System (CMS) の一種であるXOOPSと、Xerox社のDocument Archive SystemであるDocuShareを連携させることで実現した (<http://hydi.keio.ac.jp>)。

### ・2005年度活動報告

本ユニットは、2005年秋の活動開始以来、研究メンバーがそれぞれの分担作業を進めると共に、ほぼ週に一度のペースで会合を持ち、作業進捗状況の確認や批判的検討などを行っている。議論は対面で行われると同時に、hydiのフォーラムを用いても行われている。

以下にhydiのコンセプト並びにシステムデザインについて説明する。

#### 1. hydiのコンセプト

##### 1.1. 超表象デジタル研究とhydi

旧来の大学は、それぞれの研究者が専門領域の知識を深めて行った結果、知の細分化と分断化が著しくなった。超表象デジタル研究は、こうした知のあり方を見直し、さまざまな知の領域における研究をそれぞれ分断されたものとして捉えるのではなく、それらを超領域的に統合するメタモデルを構築することにより、知の生産と継承の場としてのキャンパスづくりに貢献しようとするものである。

##### 1.2. hydiの目的

そうしたプロセスの具現化のために開発を進めているのが、hydiである。hydiは、それぞれの研究プロジェクトの共同作業を円滑化するコミュニケーション・システムである。研究メンバーはさまざまなフォーマットの文書・音声・画像ファイルを共有・交換し、共同で加工して研究成果の作成を行うが、hydiはそのプロセスをサポートする。

すなわち、共同研究が分断された知の並列として存在するのではなく、それぞれの研究のもつ意味、すなわちその「表象」を「超」領域的にデジタル化することにより、知の共有と研究の超領域的統括を有機的に機能させようとするものである。

#### 1.3. hydiの機能と特徴

hydiは共同研究のコミュニケーション・システムとして開発されている。カレンダー、ニュース、連絡ボード、文書交換システム、音声・画像ストリーミング・システムからなり、サーバー・コンピュータ上におかれた一連のプログラムで、インターネットを通じて個々のPCから情報にアクセスすることができる。

これらの技術の多くは既存のものであるが、これらを統合して、大学の共同研究におけるさまざまなプロセスをひとつのシステムに収めるというものは、現在のところまだ存在していない。つまり、hydiは研究の過程でできるさまざまな電子媒体を、ひとつのバーチャルな研究スペースに置き、研究の開始から実施・完成公開までのプロセスを一元化したシステムのなかで進めていけるようにするインターフェースである。

#### 2. システム構成と機能

ここではhydiシステムを構成する機能群を示す。

##### 2.1. ドキュメント管理

- ・マイクロソフトオフィス製品 (Word, Excel, PowerPoint)、PDF、画像 (JPEG, GIF, BMP)、映像 (MPEG, WMV, AVI) など、多種多様なファイルフォーマットをサポートする

- ・サーバー上に格納されたコンテンツに対して、アクセスコントロールを実現している。システム利用者はサーバー上のコンテンツのアクセス権を設定することによって、そのコンテンツの公開対象者を自由に設定できる。

- ・コンテンツのファイル名だけでなく、PDFやWord文書、パワーポイントファイル中のキーワードに対する検索をサポートする。

- ・コンテンツの閲覧画面に、そのコンテンツのサマリー (ドキュメントの冒頭部分、あるいは、要約) を提示することによって、ドキュメント閲覧の際の検索性を向上させる。

- ・コンテンツの編集過程を記録するバージョン管理機能を有する。以前のコンテンツの状態を参照することを可能にすることによって、グループ内でコンテンツを編集していく作業をサポートする。

## 2.2. フォーラム

・システム利用者間におけるディスカッションやコミュニケーションを行う機能を提供し、HTML タグを利用することによる表現力の高いコミュニケーションをサポートする。

・フォーラムに新規の投稿があった際、システム利用者はそれを通知するメールを受け取ることができる。それは利用者が特定のフォーラムに対して、書き込みがあれば通知されるように事前に設定することによって可能となる。

## 2.3. ニュース

・ニュース機能はシステム利用者がシステムのトップページに情報を掲載することをサポートする。この機能によって、塾内外に対して広く情報を発信することが容易となる。

## 2.4. カレンダー

・ミーティングやイベントに関するスケジュール情報を共有することが可能となる。

・フォーラムと同様に、カレンダーに新たな情報が追加された際に、その通知をメールで受け取ることが可能である。

## 2.5. コンテンツ検索

・キーワードによるコンテンツ検索機能によって、システム利用者がシステム内に格納されたコンテンツを検索することをサポートする。

### ・今後の展望

これまでの基盤整備の進展を受け、今後はプロジェクト全体での hydi システム運用を最重要課題とする。そのための支援活動を中心に据える。

また、このようなシステム運用を定着させる活動と並行して、hydi システムのマルチメディア・マルチリンガル化を進める。また周辺の課題として検索エンジンを整備する。

### 【研究メンバー】

境一三(経)、佐藤望(商)、倉館健一(外国語教育研究センター)、森 薫(政策・メディア研究科修士2年)、佐々木朋美(総合政策学部4年)

## フレーム意味論によるオンライン日本語語彙情報資源の構築

研究代表者 鈴木亮子(経済学部)

### ・研究概要

認知フレームの概念と自然言語処理的手法を用いて、詳細な意味情報をコーパスデータに付与した日本語基本語彙に関する情報資源「日本語フレームネット」を構築する。すなわち、コーパスデータを語彙分析に利用し、その結果を意味情報付与の形でコーパスに反映させてデータベースとして利用可能にする。

### ・2005年度の活動報告

アノテーションツールの完成と検索ツールとの連携実現

オンラインアノテーションの実現:「移動」関連、「危険」関連、「商取引」、「窃盗」などの関連フレームについて、約15語彙項目について500例文程度

Crosslinguistic フレームネット会議参加:アノテーションツールについて発表("The FrameNet desktop software as part of Japanese FrameNet")

Hiyoshi Research Portfolio 2005 (12/20,21) 出展

成果発表は以下のとおり。

鈴木亮子(2005)「コーパスを利用した研究の一事例 日本語フレームネット」言語と人間研究会会報(第41号)

『日本認知言語学会論文集第5巻』:小原京子、石崎俊、大堀壽夫、斎藤博昭、鈴木亮子、藤井聖子(2005)「日本語フレームネット概要」

大堀壽夫(2005)「語彙記述におけるフレーム意味論」斎藤博昭(2005)「日本語フレームネットコーパスおよび検索ツール」

藤井聖子(2005)「日本語フレームネットにおける「伝達」領域での分析」

鈴木亮子(2005)「評価を伴う伝達動詞:『ほめる』『しかる』『おこる』の分析」

### ・課題と2006年度研究計画

今後の課題として、言語分析班によるボトムアップの語彙情報資源構築と自然言語処理班によるトップダウンの語彙情報資源構築のより一層の連携があげられる。

2006年度の目的としては、日本語基本語彙のうち、和語を中心とした動詞、形容詞、名詞について認知フ

レームに基づく意味情報を付与し、語彙情報資源として蓄積する。対象とする認知フレームは、「移動」と「言語コミュニケーション」関連のものに加え、種々の人間活動の中で普遍的で最も基本となる領域に関するものと、主に英語ならびにスペイン語フレームネットで定義済みのものとする。

2006年度の実施計画は以下の通りである。

### 〔言語分析班〕

- 1)日本語基本語彙項目の語彙分析・アノテーション
- 2)英語フレームネットで構築されたフレーム体系の日本語語彙への適用可能性の検討
- 3)日英語比較対照語彙・フレーム分析

### 〔自然言語処理班〕

- 1)分析用コーパスの拡充
- 2)ツールの改良
- 3)データベースの管理
- 4)自然言語処理的手法による日本語フレームネットのブートストラッピングの検討

### 【研究メンバー】

鈴木亮子(経)、斎藤博昭(理)、石崎俊(環境情報)、大堀壽夫(東京大学大学院総合文化助教授)、藤井聖子(東京大学大学院総合文化助教授)、小原京子(理)

## 解析的整数論の諸相

研究代表者 桂田昌紀(経済学部)

### ・研究概要および2005度の主な成果

以下、 $s$  を複素変数、 $x$  を実数パラメータで  $x > 0$  とし  $e(s, x) = e^{-sx}$  とおく。  $(s, x)$  で級数  $\sum_{n=0}^{\infty} e^{-n(s+x)}$  を全  $s$  平面上の有理型関数に接続して得られる Lerch ゼータ関数を表す。  $x$  が整数のとき  $(s, x)$  は Hurwitz ゼータ関数  $\zeta(s, x)$  に、さらに  $(s, 1) = \zeta(s)$  は Riemann ゼータ関数となる。  $(s, 1+x)$  は  $(s)$  の各項を  $x$  だけ変動させたものと考えられるが、この立場から、本研究代表者は、 $a > 0$  を任意定数、 $m$  を正整数とすると、多重二乗平均  $\int_0^1 \cdots \int_0^1 (s, a+x_1+\cdots+x_m)^2 dx_1 \cdots dx_m$  の  $\text{Im } s \rightarrow \pm \infty$  における完全漸近展開を導いた。

他方、 $z = x+iy$  を複素上半平面のパラメタとすると、これに付随する Epstein ゼータ関数  $\zeta^s(s; z)$  が、
$$\zeta^s(s; z) = \sum_{m,n \neq 0} |m+nz|^{-2s} \quad (m=n=0 \text{ となる項を除く})$$
 およびその全  $s$  平面上の有理型関数への接続として定義されるが、本研究代表者は昨年度よりの研究で、 $\zeta^s(s; z)$  の  $y = \text{Im}z \rightarrow +\infty$  における完全漸近展開を導いた。次に、 $s$  を  $\text{Re} s > 0, \text{Re} z > 0$  なる複素パラメタとし、 $\Gamma(s)$  でガンマ関数、 $B(s, t) = \Gamma(s)\Gamma(t)/\Gamma(s+t)$  でベータ関数を表すとき、上記の結果の深化として、研究代表者は  $\zeta^s(s; z)$  の (Poisson 分布型加重平均ともみなせる)  $y$  軸方向への Laplace-Mellin 変換  $\mathcal{LM}_{y,Y} \zeta^s(s; x+iy) = \Gamma(s)^{-1} \int_0^\infty \zeta^s(s; x+iyY) y^{s-1} e^{-y} dy$  および Riemann-Liouville 変換  $\mathcal{RL}_{y,Y} \zeta^s(s; x+iy) = B(s, 1-s)^{-1} \int_0^1 \zeta^s(s; x+iyY) y^{s-1} (1-y)^{-s-1} dy$  のそれぞれ  $Y \rightarrow +\infty$  における完全漸近展開を導出した (前者については欧文論文が出版予定、また後者については欧文論文を準備中)。

以上で得られた成果はいずれも、これまであまり組織的な解明が行われて来なかった、ゼータ関数の積分変換の漸近的挙動の解析という、新たな研究の方向性を示唆する。そこで本研究では、今後の課題として、上に示唆された問題意識をさらに深化発展させるべく、ゼータ関数の種々の積分変換の定式化とその漸近的挙動の解明を中心に研究を推進する。

・本研究の推進を目的とした国際会議の開催  
 2005年度は、上述した活動以外にも、本研究課題の多様な深化・発展を目指し、解析的整数論における二つの major topics である i) ゼータ・ $L$  関数； ii) ディオファントス解析、をそれぞれ主テーマとする以下の国際研究集会が、本研究代表者を main organizer として開催された： i) “Analytic Number Theory 2005”(京都大学数理解析研究所、2005年10月17日～19日)； ii) “Diophantine Analysis and Related Fields 2006”(慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎、2006年3月7日～10日)。これまで国内においては、5日間を会期とする一つの会議に i), ii) の領域双方を組み込んだ合同の研究集会を開催していたが、今回はこれらを自然な形に分割し、それぞれの日程を若干ではあるが増加させることで、講演内容の豊富・多様化が図られるとともに、日程に余裕のあるプログラム編成により、参加者相互の緊密な交流も可能となった。結果として、両研究集会とも、国内外から解析的整数論関連方面の多数の指導的専門家の参加を得ることができ、会場等

行われた多彩・活発かつ創造的な研究討議・交流を契機として、本領域における多数の有望な単独・共同研究への端緒を開くなど、研究集会として極めて良好な成果を上げるとともに、本研究課題の今後に向け、さらなる深化・発展への展望を切り拓くことが出来た。

・研究成果と今後の課題  
 本研究に関する今年度の主要は以下の通り。

Masanori Katsurada, An application of Mellin-Barnes type integrals to the mean square of Lerch zeta-functions II, *Collectanea Mathematica* **56**(1) (2005), 57–83.

Masanori Katsurada, Complete asymptotic expansions associated with Epstein zeta-functions, *The Ramanujan Journal*, (to appear).

Masanori Katsurada, Asymptotic series associated with Epstein zeta-functions and their integral transforms, *R.I.M.S. Kôkyûroku*, (to appear).

Masaaki Amou and Keijo Väänänen, Linear independence of the values of  $q$ -hypergeometric series and related functions, *The Ramanujan Journal* **9** (2005), 317–339.

Masaaki Amou and Keijo Väänänen, On linear independence of theta values, *Monatshefte für Mathematik* **144** (2005), 1–11.

Masaaki Amou and Yann Bugeaud, Sur la séparation des racines des polynômes et une question de Sprindžuk, *The Ramanujan Journal* **9** (2005), 25–32.

Masayoshi Hata, Note on the fractional parts of  $n^t$ , *Acta Arithmetica* **120** (2005) 153–157.

Takumi Noda, Asymptotic expansions of the non-holomorphic Eisenstein series II, *R.I.M.S. Kôkyûroku*, (to appear).

Chr. Deninger and A. Wermer, Line bundles and  $p$ -adic characters, in “*Number fields and function fields – two parallel words*,” pp.101–131, *Progr. Math.*, 239, 2005, Birkhäuser Boston.

Chr. Deninger and A. Wermer, Vector bundles on  $p$ -adic curves and parallel transport, *Ann. Sci. École Norm. Sup.* (4) **38** (2005), 553–597.

今後の課題として、上の研究で得られたゼータ関数 (とその積分変換の) 漸近的挙動と、種々の  $q$  超幾何関数のパラメタ  $q = e^{-t}$  ( $\text{Re } t > 0$ ) と変換したときの  $t \rightarrow 0$  における漸近的挙動との内的連関の存在についても解明を進めたい。

## 【研究メンバー】

桂田昌紀(経)、塩川宇賢(理)、光道隆(経)、西岡久美子(経)、田中孝明(理)、Deninger, Christopher (Munster 大学数学科教授)、畑政義(京都大学理学研究科教授)、天羽雅昭(群馬大学工学部助教授)、永田誠(京都大学数理解析研究所助手)

## 近代日本の健康転換

研究代表者 鈴木晃仁(経済学部)

## .研究概要

文部科学省学術創成研究「曆象オーサリング・システムを用いた危機管理研究」の一環である本研究は、近代日本における感染症の盛衰を主題として取り上げた。そして、何が感染症による死者数・患者数に影響を与えたのかという問題と、感染症の盛衰が医療体制を含めて社会にどのような影響を与えたのかという、双方向の問題を研究した。その結果、19世紀から20世紀の欧米諸国で観察される、都市部で感染症による死亡率が高い状況が徐々に改善され、農村部のそれと逆転するというプロセス(アーバン・ペナルティ)が日本ではあまり強く観察されなかったこと、また、病気ごとの都市の超過死亡を見ると、病気によってばらつきがあり、肺炎などでは都市の超過死亡はむしろ低いという現象が観察された。

一方、感染症対策については、特に東京の赤痢を題材にして、1930年代以降の患者数の急激な増加に対応して、衛生インフラによる解決よりも、人々の生活習慣を標的にしたキャンペーンに頼るという特徴をもった対策が展開された。

Table 1 Numbers of reported episodes per person per year

	A	B	C	D	Total
0-5 yrs	5.3	5.2	4.5	3.7	4.7
Total	2.9	2.7	2.5	2	2.5

A, B, C, D は家賃(持ち家の場合は家賃換算)でみた所得水準を表す。

A=1-12.5 円、B=13-20 円、C=21 - 35 円、D=36-300 円

Table 2 Percentage of medical consultation according to the rent paid and disease types (selected)

	A (0-12.5)	B (13-20)	C (21-35)	D (36-300)
Cold	21.4	26	27.9	36.4
Injuries	21.4	16	16.7	16.7
Eyes	31.5	28.6	68.2	50
Acute Infectious Diseases	25.7	45.2	84.6	65.5
Respiratory	41.4	33.3	37.8	46.3
Dental	56.6	65.8	83.3	89.8
Stiff Shoulders	0	0	12	0
Alimentary	23.8	35.1	42.4	27.6
Headache	0	6.7	25	9.1
Fever	34.4	27.8	32.1	58.8
Skin	18.5	17.1	22.7	38.3
Frostbite	0	3.3	0	4.5

## . 2005 年度の活動報告

これらの研究から多くの知見が得られた。たとえば1938年の東京における罹患と受療のパターンについて特に興味深いことが明らかになった。表1に示したように、所得水準が低い世帯ほど、傷病に罹患し治療を受ける頻度が高く、しかもこれには世帯の年齢構造の違い(「貧乏人の子沢山」)は関わっていない。全体で見ただけでも0-5歳に限って見た場合でも、もっとも所得が低い世帯は最も高い世帯に較べてほぼ50%程度罹患率・受療率が高い。

この特徴は実は注目に値する。たしかに低所得者ほど病気になりやすいのは自明である。しかし、歴史上の事例や現在の開発途上国における研究を参照すると、低所得層ほど罹患率は高いにもかかわらず受療率は低いというパラドックスが顕著である。低所得層にとって医療費の負担が prohibitive なものでなくなったときに、このパラドックスは解決される。1938年の東京においては、医療保険は必ずしも普及していないにもかかわらず、罹患と受療のアンバランスは解決されていると考えるべきである。

もうひとつの興味深い点は、医学化の進展の度合いが病気によって異なっていたことである。身体の不調を感じたときに、医療専門職の診断を仰ぐか、それとも自己治療で済ませるかというのは、医学化(medicalization)の程度によって変わってくるといわれている。医療が有料あるいは極めて高価なサービスであるとき、医学化の程度が所得によって変わってくるのは自明である。1938年の調査は、医学化の程度は、所得水準だけでなく傷病の種類によってもむらがあったということを教えてくれる。表2は、傷病を風邪、外傷、眼科、急性感染症、呼吸器系、歯科、かたこり、消化器系、頭痛、発熱、皮膚、しもやけに大別して、それぞれの所得水準において医者にかかったエピソードのパーセンテージを表したものである。かたこりやし

もやけといった命に係らず激越な苦痛を与えないマイナーな傷病においては、どの所得水準においても医者にかかる割合は低い。一方で、外傷や呼吸器系などにおいてはあまり変わらない。大きく違うのは歯科と急性感染症である。このうち急性感染症は、単に苦痛からの解放や生命の危険の回避を解決するために高所得層が医師の診断を求めたということだけではなかっただろう。

#### 【研究メンバー】

鈴木晃仁(経)、石谷哲子(G-SEC 研究員)、馬場わかな(G-SEC 研究員)、永島剛(専修大学経済学部講師)

細胞行動データベースを利用したオントロジー構築ならびに動画作成  
研究代表者 根岸寿美子(商学部)

#### ・研究概要

日吉キャンパスで研究ならびに教育用として作成されてきた「高次生命現象理解のための細胞行動データベース(Cell Behavior DataBase; CBDB)」をもとに、(1)CBDB に収録されているデータ項目のひとつである生物種(動物種)に関するオントロジー構築、(2)高次生命現象に関する顕微鏡映像を含むビデオから細胞行動を抽出し動画データの作成を行った。(1)の課題に関しては、CBDB に数多く収録されている動物種のデータをもとに海綿動物から脊椎動物に至るまでの動物界において、門、綱、種に分類したオントロジーの構築を試みた。(2)の課題に対しては、NHK が出版している「驚異の小宇宙人体; 1~5巻」をデータ抽出の材料として、そこに見られるいくつかの生命現象に関する細胞行動データを、CBDB のデータ項目である「細胞(主部)が」、「どういった条件(入力)」、「何を行う(出力)」といった3項目に分解する作業をおして、動画情報の加工を行った。

#### ・2005年度の活動報告

上記の研究概要に関して、日本動物学会第76回大会(筑波国際会議場、2005)での2つのポスター発表、日吉リサーチポートフォリオ(2005年12月)での2つ

のポスター発表、ならびにオントロジー学際研究集会(2006年、3月)において口頭発表を行った。

#### 本動物学会第76回大会

「細胞行動データベース(2): 語彙の連関を探る」団まりな、岩爪道昭、金子洋之

「細胞行動データベース(3): 細胞行動データベースへの動画取り込み」根岸寿美子、佐藤由紀子、団まりな、濱中玄、小杉有希子、小林香菜、小原史紗子、初瀬涉、古川亮平、金子洋之

#### 日吉リサーチポートフォリオ

「細胞行動データベースの応用 研究と教育での使用例」(2005)研究代表者: 金子洋之(日吉生物教室 文学部)

「細胞行動データベース 動画の効用」(2005)研究代表者: 佐藤由紀子(日吉生物教室 商学部)

#### オントロジー学際研究集会

「Cell Behavior DataBase: for understanding higher biological phenomena」; Hiroyuki Kaneko<sup>1</sup>, Yukiko Sato<sup>2</sup> and Marina Dan-Sohkawa<sup>3</sup> (1,2; Department of Biology, Keio University, 3; Hierarchical Biological Lab.)

#### ・研究成果と課題

(1) 生物種名(動物種名)オントロジーの構築; CBDB に収録されている約1000件の動物種に関するデータをもとに、生物学的な分類方法に従って、階層的な分類表を完成することができた。この分類表をもとにした動物種名オントロジー構築をほぼ終えている。現在、CBDB 上での動物種の語彙関連の検索を可能にするプログラムを作成しており、作成後には、CBDB 本体へ動物種検索プログラムの実装に入っていく予定である。生物種名は、比較的構築し易いタイプのオントロジーであるが、別のデータ項目である「何を行う(出力)」に関するオントロジー構築を開始することが望まれる。

(2) 動画データの作成とCBDB への導入; NHK のビデオ「驚異の小宇宙人体」より、約30件の細胞行動を収録した。その内容は、心筋細胞の拍動、マクロファージの食作用、肝臓細胞の分裂、破骨細胞の骨溶解など多様な細胞行動例を含んでいる。静止画による提示に比べ、細胞行動のダイナミクスを一目で理解できることを示し得た。本研究で採用したNHK ビデオからのデータ取得に関し、公開に向けての著作権の取得の問題が残されている。

(3) 2006年の「三色旗」の特集記事での発表(2006、No.694);「高次生命現象理解のための細胞行動データベースの作成」のタイトルで、CBDBの作成意義(細胞の視点から)、CBDBの実体(CBDB入門)ならびに作成現場の紹介(ものづくりの現場から)を公表した。研究的側面における発表として、科学論文への投稿計画を立てている。

(4) CBDBの表装の完了  
トップページをはじめ、データリスト、カード部分のロゴを含んだデザイン、使用のための文字アレンジなどの表装に関する作業が完了した。

#### ・将来展望

本文中に記したように、(1)GP事業での発信(机上での生物学実験)、(2)理系、文系の授業用教材としてCBDBを実際に用いること、(3)生物学領域の研究として学術論文を作成することを完成させる。

#### 【研究メンバー】

根岸寿美子(商)、金子洋之(文)、長谷川由利子(商)、岡浩太郎(理)、中沢英夫(医)、澤田佳一郎(階層生物学研究ラボ研究員)、団まりな(階層生物学研究ラボ責任研究員)

GISを用いた自然環境および土地利用変遷の解析  
研究代表者 松原彰子(経済学部)

#### ・研究概要

GIS(地理情報システム)は、地表周辺で起こる諸現象を空間的に分析・表現するための研究手法であり、現在では地理学のみならず、さまざまな分野で広く取り入れられている。GISによる解析を行うことで、事象の正確な地理的分布を表示することができ、その時間的变化を解析する際にも高精度の情報提供が可能になる。

本研究は、申請者が今までに蓄積してきた地形環境の歴史の変遷に関する研究成果を、GISを用いてデジタル化した地図として表示し、気候変化や海面変化

などの自然環境自体の変化と人間活動の変化が、地形変化にどのように関わってきたかを明確にすることを目的にしたものである。

本研究は、「曆象オーサリング・ツールによる危機管理研究(研究代表者・友部謙一)の研究費を使用して行ったものである。

#### ・2005年度の活動報告

2005年度の活動内容は、以下のとおりである。

1. 日吉・矢上キャンパスおよび湘南藤沢キャンパスにおける過去約100年間の地形変遷過程を復元し、自然地形と人工的に改変された地形との区別を明確にした。

明治20年代以降に作成された6時期の地形図を、GISを用いて現在の地形図と重ね合わせ、具体的な地形の改変過程を復元した。さらに、各キャンパスの遺跡分布を重ねることによって、遺跡立地と地形との関係についても考察した。

2. 東京湾、相模湾、駿河湾沿岸地域および浜名湖沿岸の明治期の地形図と現在の地形図とをGISを用いて重ね合わせ、過去約100年間における海岸線の位置の変化、および河川の流路の変化を明確にした。

#### ・研究成果と課題

関東平野の台地上に立地する日吉・矢上キャンパスと湘南藤沢キャンパスを例にして、長期的な時間スケールにおける自然要因による地形発達過程と、短期的な時間スケールにおける人為的要因による地形改変過程の考察を行った。その結果、各キャンパスの現在の地形には、これらの両方が複合して現れていることが明らかになった。また、自然要因によって形成された地形と先史時代の人間活動の場との対応関係が認められる一方で、近年の土地改変の中には、自然地形を利用しているものと人工的につくられたものとが混在していることも明確になった。

したがって、人間による土地利用が進んでいる地域の地形を解析するには、自然要因と人為的要因という時間スケール、質ともに異なる2つの要素による地形変化を区別した上で、その土地の履歴を明確にすることが必要である。

地形条件と遺跡立地との関係を考察した結果、日吉・矢上キャンパスおよび湘南藤沢キャンパスに立地する縄文時代以降の遺跡は、いずれも段丘面上を中心に立地しており、先史時代の人間活動の場とし

て自然地形を踏まえた土地の選定が行われていたことが明らかになった。

一方、東京湾、相模湾、駿河湾沿岸地域および浜名湖沿岸における過去100年間の海岸線変化を明らかにした結果、人為的要因に基づく海岸への土砂供給量の減少が海岸侵食として現れている地域(富士川河口周辺、駿河湾北西岸の蒲原・由比・興津地域、三保半島、天竜川河口周辺など)と、干拓地・埋立て地の造成によって海岸線が前進した地域(東京湾沿岸、清水港周辺、浜名湖湖岸など)のほかに、自然要因による砂の堆積で砂州地形が成長した浜名湖湖口および東京湾東岸の富津砂嘴の例が確認された。

以上のように、現在の地形に現れていない自然地形を把握することや、海岸線変遷の実態を明確にすることは、防災の観点からも、地震災害や津波・高潮災害、洪水・土砂災害の危険度を判定する際において必要不可欠な情報といえる。

研究成果の一部は慶應義塾大学日吉紀要(社会科学)第16号に、「慶應義塾大学日吉・矢上キャンパス、湘南藤沢キャンパスの地形変遷」として発表した。

#### 【研究メンバー】

松原彰子(経)、友部謙一(経)、長田進(経)、郭俊麟(G-SEC 研究員)、柿坂学(G-SEC 研究員)

### 比喩的思考と比喩的言語の認知意味論：コーパスの作成と分析

研究代表者 辻 幸夫(法学部)

#### 研究概要

ヒトの認知活動および適応行動という視点から現実の場における言語現象を観察すると、記号体系としての言語が、さまざまな心理的・認知的要因、さらには社会的・生理的な要因などと絡み合いながらダイナミックに作り上げられていることがわかる。

本研究では、ヒトの思考・言語・行動を支える種々の認知活動の中から、比喩的な思考と比喩的な言語に焦点をあてて考察する。比喩的な思考と言語の存在によって、ヒトは事象の理解、知識の効率的蓄積や

創造的構築が可能になると考えるからである。

ところが、言語学の多くが拠り所とする理論的構築物や直感的言語データだけでは、その複雑な様相の現実を的確に把握し説明することは難しい。したがって、本研究においては、まず比喩的な言語事象について、さまざまな発話資料やインターネットを含む書き言葉を一次資料として、パラ言語的情報などを含むコーパスを作成する。そして、それに基づき、言語の認知的側面や適応行動的側面において比喩的要素がいかにかに不可欠な状態で入り込んでいるか詳らかにすることを試みる。

なお本研究は、2001年度から2005年度までの文部科学省科学研究費補助金(学術創成研究)および2004年度から2005年度までのマイクロソフト社から本研究代表者への指定寄付金をもとにした諸研究の一環として実施された。

#### 2005年度の活動報告

2005年度は、人間の持つ記号化ないし象徴化の能力について明らかにする認知科学的関心から、比喩的思考と比喩的言語について認知意味論の立場から検討をした。特に以下の から について実施した。

#### 発話と言語表現の関係

言語を認知活動という広い観点から捉えれば、意味と表現形式が必ずしも一対一の対応をするわけではないことは当然の帰結として考えられる。本研究では「行動としての言語」という観点から、口語対話に限らず、インターネット上のログも対象として、言語資料の収集とコーパスの作成および類型分析を行った。

#### メタファーの抽出

事象の理解や知識形成、あるいは行動の指標となるような比喩的思考と言語の関係を明らかにするために、さまざまな言語資料に現れる比喩現象の中から、とりわけその戦略的使用を具現するような言語資料の収集と分析を行った。特に2005年度はその理論的立場をまとめた。

#### 用語の理解度

意味的透明性が少ない用語の典型例として、IT用語などの日本語用例を収集した。新語を含む語彙構成と理解度の分析を行いつつ、語彙学習のメカニズムと比喩的メンタルモデルの形成との相関を調べた。2005年度は特にそうした考察を可能にするデータ収集と分析を実施した。

・研究成果と課題

本研究プロジェクトについては、準備段階が終わり、分析の段階に入ったばかりである。現在までの準備期間中においては、論文10数本、著書4冊、翻訳書および分担執筆数件、学会発表・シンポジウムにおける口頭発表などのアウトプットを中間報告として出したが、現在もプロジェクトは進行中である。

今後は、昨年度までに作成したコーパスデータなどをさらに充実させ、さらに比喩的思考と比喩的言語の認知的側面や適応行動的側面にまつわる諸現象を明らかにしていきたい。短期的には戦略的比喩の言語・行動的諸相についてまとめていきたい。

【研究メンバー】

辻幸夫(法)、井上逸兵(法)、菅井三実(兵庫教育大学専任講師)

遷(V)セルヴァン=シュレパール家の人達( )

L'Express 誌の時代、思いのままに日本女性作家雑感、ジョルジュ・サンドとサン=シモン主義 女性指導者「教母」をめぐって、現代フランスにおける女性作家の位置 ジョルジュ・サンド、「宗教シンボル禁止法」への一考察 フランス流のヴェールは可能か。

【研究メンバー】

宮下理恵子(法)、橋本順一(商)、秋山豊子(法)、横山千晶(法)、ナタリー・檜橋アン(法)

女性学開発プロジェクト 2005

研究代表者 宮下理恵子(法学部)

・研究概要

当研究プロジェクトは日吉在籍専任教員6名及び非常勤・外部研究者11名をメンバーとし、2004年に「女性学開発プロジェクト2004」として発足した。

研究目的：人文社会・自然科学にまたがる領域横断的な発想と思考を基に、情報・環境などの学際・複合領域を含む新たな女性学研究的の推進を目的とする。

研究内容：1999年より現在2005年2月まで研究活動を続けている「CEFEF「現代フランス社会と女性研究会」」を母胎とし、世界の女性学研究的に資する「女性学研究的の学術フロンティア機構」の形成を射程に入れた発展。

・2005年度の活動報告

Bulletin du CEFEF (Cercle d'études sur les femmes en France) 第5号 2005 テーマ  
高齢化社会における『女たちの第二の「生」』、シュルレアリスムとフェミニズムの接点 アニー・ルブラン、フランス映画における女性の表象 représentation の変

## 慶應義塾大学 日吉キャンパス公開講座

## 「創作とメディア」

## 受講者アンケート結果

## 基礎情報

期間：2005年10月1日から12月3日までの毎週土曜日

- ・3時限目(13時00分～14時30分)
- ・4時限目(14時45分～16時15分)

回数：全10回(内6回以上の出席者に対し修了証を授与)

場所：第4校舎B棟J14番教室

対象：社会人他

応募者数：269名

受講者数：244名/定員300名

修了者数：205名(約84%)

全回出席者数：54名(約22%)

アンケート回収枚数：157枚(約64%)

## 年齢内訳

10、20代	24
60代	94
70代以上	60
50代	24
40代	15
30代	15
無回答	12
合計	244

\* 受講者全体の平均年齢は58.8歳であった。

## 職業内訳

無職	92
勤め人	34
専業主婦	30
パート	7
自営業	5
その他	19
無回答	3

\* 職業の内訳では無職の方、退職された方が最も多い。

## 会場までの所要時間

1時間以内	56
30分以内	74
1時間以上	33
15分以内	25
無回答	2

\* 「横浜市民講座」の流れを受け、受講者は横浜市内の方が多く、30分～1時間以内の方が多い。

今回の講座を何で知りましたか？(複数回答可)

大学からのお知らせ	117
大学 Web ページ	38
知人より	21
新聞	6
市立図書館	4
駅PRボックス	4
生涯学習支援センター、生涯学習相談コーナー	6
生涯学習情報システム PLANET かながわ	0
パンフレット	2
その他	6

受講された動機、目的は何ですか。(複数回答可)

教養を高めるため	139
趣味・楽しみのため	112
仕事や資格取得に生かすため	5
その他	18
無回答	0

講座の内容はいかがでしたか。

満足	59
やや満足	75
どちらでもない	14
やや不満足	6
不満足	1
無回答	2

今後どのような講座を希望しますか？(2つまで選択可)

文学、歴史	77
社会問題	73
芸術、趣味	38
法律、経済	30
語学、国際交流	19
健康	19
生物、ゲノム	18
情報、メディア	11
その他	15

## 教養研究センター 規程

**第1条（設置）**慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学教養研究センター(Keio Research Center for the Liberal Arts, 以下「センター」という。)を置く。

**第2条（目的）**センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

**第3条（事業）**センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

**第4条（組織）**センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

研究員は、特別研究教員(有期)または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

事務長は、センターの事務を統括する。

職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

**第5条（運営委員会）**センターに運営委員会を置く。

運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉ITC所長
- 9 日吉キャンパス事務長
- 10 その他所長が必要と認めたる者

委員の任期は役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムの企画・運営等に関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに対する付託事項
- 7 その他必要と認める事項

**第6条（コーディネート・オフィス）**センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するためにコーディネート・オフィスを置く。

コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。

**第7条（小委員会）**運営委員会は、必要に応じて小委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

**第8条（教職員の任免）**センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。
- 3 特別研究教員(有期)については、「任免規程」の定

めるところによる。

4 訪問研究者については、「塾外学者に対する職位規程」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員及び職員の中から所長が委嘱する。

所長、副所長の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

兼任研究員の任期は、第9条に定める研究プログラムの研究期間とする。

第9条（研究プログラム） センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究で、運営委員会が審議、採択したもの。

2 一般研究：個人研究ならびに共同研究で、センターが必要と認めたもの。

3 特定研究：運営委員会の議を経て、センターが企画、立案、募集したもの。

研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

第10条（契約） 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

第11条（経理） センターの経理は「慶應義塾経理規程」の定めるところによる。

センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

外部資金の取扱い等については、研究支援センターの定めるところによる。

第12条（規程の改廃）この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決

定する。

附 則(2002年7月2日)

この規程は、2002年7月1日から施行する。

この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

## 教養研究センター

## 運営委員会委員(敬称略)

任期：2003年10月1日～2005年9月30日  
第2期(2005年度在籍者)

## 教養研究センター担当常任理事

黒田 昌裕

教養研究センター所長 横山 千晶(2004年10月から)

## 教養研究センター副所長

近藤 明彦

岩波 敦子(2004年10月から)

田上 竜也(2004年10月から)

## 教養研究センター事務長

宮木さえみ

文学部学部長 西村 太良

経済学部学部長 細田 衛士

法学部学部長 森 征一

商学部学部長 桜本 光

医学部学部長 北島 政樹

理工学部学部長 稲崎 一郎

総合政策学部学部長 小島 朋之

環境情報学部学部長 熊坂 賢次

看護医療学部学部長 吉野 肇一

文学部日吉主任 坂上 貴之

経済学部日吉主任 羽田 功

法学部日吉主任 朝吹 亮二

商学部日吉主任 小宮 英敏

医学部日吉主任 小林 常利

理工学部日吉主任 大谷 弘道

日吉研究室運営委員会委員長

小淵 昭夫

## 教養研究センター基盤研究座長

(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)

伊藤 行雄(2005年4月から)

(身体知プロジェクト)横山 千晶(2005年4月から)

特定研究研究代表 羽田 功(2005年9月から)

日吉行事企画委員会委員長

小菅 隼人

極東証券寄付講座運営委員会委員長

武藤 浩史

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

小淵 昭夫

日吉メディアセンター所長

伊藤 行雄

日吉 ITC 所長 秋山 豊子

日吉キャンパス事務長 田辺 久夫

外国語教育研究センター所長

迫村 純男

日吉学事センター部長 栗谷 文治

日吉メディアセンター事務長

遠藤 和幸

日吉事務運営サービス課長

酒井 秀明

任期：2005年10月1日～2007年9月30日  
第3期(2005年度在籍者)

## 教養研究センター担当常任理事

西村 太良

教養研究センター所長 横山 千晶

## 教養研究センター副所長

近藤 明彦

岩波 敦子

田上 竜也(2006年3月まで)

## 教養研究センター事務長

宮木さえみ(2005年10月まで)

吉川 智江(2005年11月から)

文学部学部長 関場 武

経済学部学部長 塩澤 修平

法学部学部長 小此木 政夫

商学部学部長 桜本 光

医学部学部長 池田 康夫

理工学部学部長 稲崎 一郎

総合政策学部学部長 小島 朋之

環境情報学部学部長 富田 勝

看護医療学部学部長 佐藤 蓉子

文学部日吉主任 坂上 貴之

経済学部日吉主任 羽田 功

法学部日吉主任 朝吹 亮二

商学部日吉主任 橋本 順一

医学部日吉主任 古野 泰二

理工学部日吉主任 大谷 弘道

日吉研究室運営委員会委員長

小淵 昭夫

## 教養研究センター基盤研究座長

(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)

伊藤 行雄

(身体知プロジェクト)横山 千晶

特定研究研究代表 羽田 功

日吉行事企画委員会委員長

小菅 隼人

極東証券寄付講座運営委員会委員長

武藤 浩史

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

小淵 昭夫

日吉メディアセンター所長

伊藤 行雄

日吉 ITC 所長 中山 純

日吉キャンパス事務長 田辺 久夫(2006年3月まで)

外国語教育研究センター所長

金田一 真澄

日吉学事センター部長 栗谷 文治

日吉メディアセンター事務長

遠藤 和幸(2005年10月まで)

石黒 敦子(2005年11月から)

日吉事務運営サービス課長

酒井 秀明

## 教養研究センター

## コーディネート・オフィス（敬称略）

## 研究企画ボード

・責任者：横山千晶（所長・法）  
 ・コーディネーター：坂本 光（文）、石井 明（経）、小瀧昭夫（経）、境 一三（経）、羽田 功（経）、太田昭子（法）、武藤浩史（法）、佐藤 望（商）、田上竜也（商）、種村和史（商）、橋本順一（商）、鈴木伸一（医）、岩波敦子（理工）、金田一真澄（理工）、熊倉敬聡（理工）、小菅隼人（理工）、近藤明彦（体研）、田辺久夫（キャンパス事務長）、宮木さえみ（教養研究セ、2005.10.31 まで）、吉川智江（教養研究セ、2005.11.1 ~）

## 調査・研究セクション

・責任者：近藤明彦（副所長・体研）  
 ・コーディネーター：白崎容子（文）、中島陽子（文）、境一三（経）、鈴木直樹（経）、根岸宗一郎（経）、Ballhatchet, Helen Julia（経）、八嶋由香利（経）、井上逸兵（法）、本谷裕子（法）、安田 淳（法）、瀧本佳容子（商）、加藤大仁（体研）、市古みどり（日吉メディアセ、2005.10.31 まで）、石川啓子（教養研究セ）

## 交流・連携セクション

・責任者：田上竜也（副所長・商）  
 ・コーディネーター：納富信留（文）、石井 明（経）、小瀧昭夫（経）、Gaboriaud, Marie（経）、松原彰子（経）、牛島利明（商）、佐藤 望（商）、橋本順一（商）、石井達朗（理工）、熊倉敬聡（理工）、近藤幸夫（理工）、野口和行（体研）、園田陽子（高校）、徳竹成之（高校）、野津将史（高校）、今井英喜（普通部）、甲賀崇司（教養研究セ）

## 広報・発信セクション

・責任者：岩波敦子（副所長・理工）  
 ・コーディネーター：柏崎千佳子（経）、井上逸兵（法）、大出 敦（法）、Raeside, James M（法）、佐藤 望（商）、鈴木伸一（医）、森 泉（理工）、横山由広（理工）、村松 憲（体研）、高橋純子（教養研究セ、2005.10.31 まで）、石川啓子（教養研究セ、2005.11.1 ~）

## 教養研究センター事務局

宮木さえみ（事務長、2005.10.31 まで）、吉川智江（事務長、2005.11.1 ~）、甲賀崇司、宮坂敦子

## 日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：小菅隼人（理工）  
 委員：坂本 光（文）、石井 明（経）、小瀧昭夫（経）、羽田 功（経）、下村 裕（法）、佐藤 望（商）、竹内美佳子（商）、森吉直子（商）、小宮 繁（理工）、石手 靖（体研）、河邊博史（保セ）、田辺久夫（キャンパス事務長）、酒井秀明（運営サ）、土田平和（運営サ）、北村悦子（運営サ）、長田信夫（学事セ）、藤田忠夫（学総セ）、服部剛久（学総セ）、渡辺知子（学総セ）、遠藤和幸（日吉メディアセ）、小沢ゆかり（日吉メディアセ）、日水邦昭（研究室）、山口昌子（外国語教育研究セ）

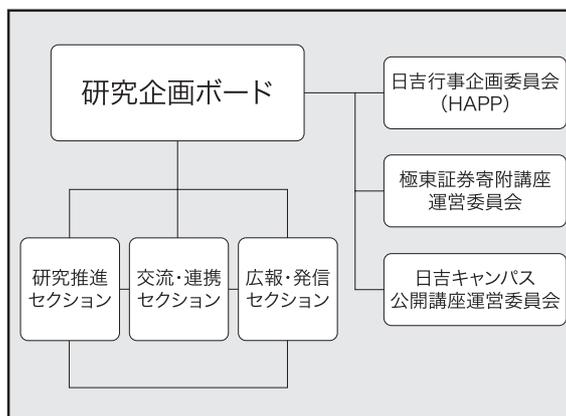
## 極東証券寄附講座運営委員会

委員長：武藤浩史（法）  
 委員：中島陽子（文）、羽田功（経）、横山千晶（法）、石原あえか（商）、田上竜也（商）、鈴木伸一（医）、近藤幸夫（理工）、熊倉敬聡（理工）、近藤明彦（体研）、河邊博史（保セ）、宮木さえみ（教養研究セ、2005.10.31 まで）、吉川智江（2005.11.1 ~）、小磯勝人（大学出版会）

## 日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：小瀧昭夫（経）  
 委員：石井 明（経）、石井康史（経）、伊藤行雄（経）、井上逸兵（法）、小瀬村誠治（法）、迫村純男（法、2005.9.30 まで）、横山和加子（商）、高桑和巳（理工）、近藤明彦（体研）、松田雅之（体研）

## コーディネート・オフィス組織図（2004.10.1 ~）



## 教養研究センター

## 所員・研究員(敬称略)

大学教養研究センター所長・副所長・事務長  
 任期：2004年10月1日～2006年9月30日  
 所長：横山千晶(法学部教授)  
 副所長：田上竜也(商学部助教授)、岩波敦子(理工学部助教授)、近藤明彦(体育研究所教授)  
 教養研究センター事務長：宮木さえみ(2005年10月31日まで)、吉川智江(2005年11月1日～)

大学教養研究センター所員  
 専任教員 9名  
 任期：2004年4月1日～2006年3月31日  
 法学部：井上逸兵(教授)、Narahashi-Henry, Nathalie(専任講師)、宮下理恵子(助教授)  
 商学部：石原あえか(助教授、2004年11月1日～)  
 国際センター：手塚千鶴子(助教授)  
 志木高等学校：速水淳子(教諭、2004年9月1日～)  
 湘南藤沢中等部・高等部：中平仁孝(教諭、2004年9月1日～)  
 普通部：鈴木淑博(教諭、2004年9月1日～)  
 幼稚舎：鈴木秀樹(教諭、2004年9月1日～)

専任教員 7名  
 任期：2005年4月1日～2006年3月31日  
 法学部：Schart, Michael(訪問助教授)、萱嶋泰成(助手)  
 理工学部：金田一真澄(教授、2006年3月30日まで)、塩川宇賢(教授)、高桑和巳(専任講師)、星元紀(教授)  
 総合政策学部：太田達也(専任講師)

専任教員 163名  
 任期：2005年4月1日～2007年3月31日  
 文学部：足立健次(助教授)、安藤寿康(教授)、大場茂(教授)、片木智年(助教授)、金子洋之(助教授)、倉田敬子(教授)、斎藤太郎(教授)、坂上貴之(教授)、坂田幸子(教授)、桜本光(助教授)、櫻井準也(助教授)、白崎容子(教授)、高橋宣也(助教授)、高山博(教授)、中島陽子(教授)、中村優治(教授)、西村太良(教授)、納富信留(助教授)、長谷山彰(教授)、辺見葉子(助教授)、増田直衛(教授)、吉田恭子(助手)  
 経済学部：厚地淳(教授)、石井明(助教授)、石井康史(助教授)、池田薫(教授)、伊藤行雄(教授)、Ainge, Michael W.(助教授)、小瀧昭夫(教授)、長田進(助教授)、柏崎千佳子(助教授)、桂田昌紀(教授)

Gaboriaud, Marie(教授)、岸由二(教授)、工藤多香子(助教授)、Knaup, Hans Joachim(教授)、後平隆(教授)、近藤光雄(教授)、境一三(教授)、佐々木由美(助教授)、志村明彦(助教授)、杉浦章介(教授)、杉岡洋子(教授)、鈴木晃仁(教授)、鈴木五郎(教授)、鈴木亮子(助教授)、鈴木直樹(教授)、竹中淑子(教授)、千田大介(助教授)、土屋博政(教授)、友部謙一(教授)、永井容子(助教授)、長沖暁子(助教授)、西尾修(教授)、西岡久美子(教授)、Notter, David(助教授)、根岸宗一郎(専任講師)、羽田功(教授)、Batty, Roger(助教授)、光道隆(教授)、福山欣司(助教授)、不破有理(教授)、星浩司(助教授)、Ballhatchet, Helen Julia(教授)、松岡和美(助教授)、松原彰子(教授)、宮崎直哉(助教授)、八嶋由香利(助教授)  
 法学部：秋山豊子(教授)、朝吹亮二(教授)、岩谷十郎(教授)、太田昭子(教授)、大出敦(専任講師)、大久保教宏(助教授)、小野裕剛(専任講師)、木俣章(専任講師)、久我俊二(教授)、小瀬村誠治(教授)、小屋逸樹(教授)、迫村純男(教授)、下村裕(教授)、志村正(専任講師)、鈴木恒男(教授)、鈴木透(教授)、辻幸夫(教授)、常山菜穂子(助教授)、Henck, Nicholas J.(訪問助教授)、本谷裕子(専任講師)、McLynn, Neil B.(教授)、武藤浩史(教授)、安田淳(教授)、Raeside, James M.(教授)、横山千晶(教授)  
 商学部：浅川順子(教授)、朝比奈緑(助教授)、牛島利明(助教授)、小宮英敏(教授)、佐藤望(助教授)、白旗優(助教授)、田上竜也(助教授)、瀧本佳容子(助教授)、竹内美佳子(助教授)、種村和史(助教授)、根岸寿美子(教授)、橋本順一(教授)、長谷川由利子(助教授)、英知明(教授)、福沢利彦(助教授)、森吉直子(専任講師)、安田公美(専任講師)、湯川武(教授)、横山和加子(教授)  
 医学部：大石毅(助手)、小林常利(教授)、小町谷尚子(助教授)、鈴木伸一(専任講師)、鈴木由紀(専任講師)、中澤英夫(助手)、三井隆久(助教授)  
 理工学部：石井達朗(教授)、岩波敦子(助教授)、大谷弘道(教授)、岡浩太郎(教授)、小原京子(助教授)、亀谷幸生(助教授)、熊倉敬聡(教授)、小菅隼人(助教授)、小宮繁(専任講師)、近藤幸夫(助教授)、斎藤博昭(専任講師)、坂川博宣(助手)、下村俊(教授)、田中孝明(助手)、田村要造(助教授)、仲田均(教授)、萩原眞一(教授)、広本勝也(教授)、北條彰宏(助教授)、前島信(教授)、前田吉昭(教授)、森泉(助教授)、森吉仁志(助教授)、横山由広(助教授)

環境情報学部：石崎 俊(教授)  
 保健管理センター：大野 裕(教授)、河辺博史(教授)、  
 西村由貴(専任講師)  
 体育研究所：石手 靖(助教授)、加藤大仁(助教授)、  
 近藤明彦(教授)、野口和行(専任講師)、松田雅之(助  
 教授)、村松 憲(専任講師)、村山光義(助教授)、吉  
 田泰将(助教授)  
 言語文化研究所：高橋通男(教授)  
 外国語教育研究センター：倉館健一(助手)  
 高等学校：大西 章(教諭)、園田陽子(教諭)、徳竹成  
 之(教諭)、野津将史(教諭)  
 普通部：今井英喜(教諭)、太田 弘(教諭)

大学教養研究センター兼任研究員

塾外研究者等 23名

任期：2005年4月1日～2006年3月31日

Deninger, Christopher( Munster 大学数学自然科学部  
 教授)

天羽雅昭(群馬大学工学部助教授)

石谷響子(G-SEC 研究員)

磯崎敦仁(慶應義塾大学大学院法務研究科、2005年  
 12月1日～)

板倉杏介(スケープ・デザイナー)

白杵 陽(国立民俗学博物館地域研究企画交流セン  
 ター教授)

内田伸哉(慶應義塾大学大学院理工学研究科修士課  
 程1年)

内海雄介(映像作家)

大堀壽夫(東京大学大学院総合文化助教授)

柿坂 学(G-SEC 研究員)

郭 俊麟(G-SEC 研究員)

佐谷眞木人(恵泉女学院大学人文学部日本文化学科  
 助教授)

澤田佳一郎(階層生物学研究ラボ研究員)

菅井三実(兵庫教育大学専任講師)

妹尾堅一郎(東京大学先端科学技術研究センター特任  
 教授)

団 まりな(階層生物学研究ラボ責任研究員)

中野泰志(東京大学先端科学技術研究センター特任教  
 授)

永島 剛(専修大学経済学部講師)

永田 誠(京都大学数理解析研究所助手)

畑 政義(京都大学理学研究科教授)

馬場わかな(G-SEC 研究員)

ヒョン・G・リュウ(ソウル国立大学基礎教育院招聘教  
 授)

藤井聖子(東京大学大学院総合文化助教授)

## 2005年度の主な活動記録

Date	Contents
4	<p>極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」『生命の教養学 生命と自己』開講(春学期)</p> <p>センター全体会議 / 新任教員へのセンターガイダンス</p> <p>6日 日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業公募(第1次)(6月2日採択)</p> <p>12日 講演会「塾長と日吉で語ろう」</p> <p>13日 学術フロンティア「知との遭遇」研究グループ学会発表ソウル国立大学“Liberal Arts Education in China, Japan and Korea: Challenges and Prospects” “Critical Thinkers: Enhancing Japanese Students' Experience of Lectures Through Small-Group Seminars”</p> <p>14・15日</p>
6	<p>3日 日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業公募(第2次)(7月20日採択)</p> <p>4日 特別公開対談「教養教育の将来を見据えて 次世代に何をどう伝えるか」</p> <p>11日 The First Year Experience 参加(イギリス:サザンプトン大学)(7月14日まで)</p>
7	<p>16日 センターシンポジウム(第7回)日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点</p> <p>23日 基盤研究講演会「大学カリキュラムにおける国際教育 専門教育と語学教育の融合の問題」「大学カリキュラムにおける履修登録制度とGPA制度 大学教育の質を確保するための戦略」</p> <p>極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」開講(秋学期)</p>
9	<p>9日 学術フロンティア平成17年度私立大学学術研究高度化推進事業(継続分)の選定</p> <p>29日 学術フロンティア第1回プロジェクト全体説明会</p>
10	<p>1日 日吉キャンパス公開講座「創作とメディア」(12月3日まで10回)</p> <p>3日 科学研究費補助金取得のための勉強会</p> <p>11日 FDワークショップ(第3回)ディスカッションをいかにファシリテートするか</p> <p>14日 センター運営委員会</p> <p>15日 基盤研究講演会「大学評価と質保証政策の国際的動向」「国立大学改革と今後の大学教育 京都大学を例として」</p>
11	<p>1日 慶應義塾におけるドイツ年記念公開セミナー 「ゲーテの『ファウスト』と脳内人口操作 21世紀における新人類「ホムンクルス」」</p> <p>4日 学術フロンティア「テクノキャンパス構築研究グループ」主催研究会(秋葉原クロスフィールドにて)</p> <p>10日 セミナー FDを考える(第6回)</p> <p>「『構造的教授法』 テーマ発見と書く能力 ドイツ・ケルン大学ライティング・センターの挑戦」</p> <p>11日 慶應義塾におけるドイツ年記念公開セミナー「敵か味方か ロボットをめぐる文化」</p> <p>15日 基盤研究研究会「慶應義塾大学における外国語教育の現状と改革の展望について」</p> <p>22日 学術フロンティア第2回プロジェクト全体説明会</p>
12	<p>3日 日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業成果報告会</p> <p>基盤研究研究会「能力別クラス編成とプレースメント・テストについて」「商学部における数学のクラス編成について」「慶應義塾における国際連携プログラムの展開シナリオ」</p> <p>17日 開かれゆくキャンパス 第3回「学生フォーラム」感動する大学を作るために」感動の大学を目指して～ Yes, We Can Do!～」</p> <p>20日 開かれゆくキャンパス 第4回「21世紀の商店街」</p> <p>20・21日 Hiyoshi Research Portfolio 学術フロンティア「知との遭遇」研究グループシンポジウム「ハイパー・リベラルアーツ - 新しい教養教育を考える -」大学への架け橋 - そもそも大学は何をする場所なのか</p> <p>22日 学術フロンティア「コミュニケーションキャンパス構築研究グループ」主催研究会 ポータルサイトの開発状況報告</p>
1	<p>2日 韓国教育研究機関(延世大学・成均館大学・ソウル大学)訪問(1月5日まで)</p> <p>7日 学術フロンティア「温故知新」型教育研究グループ第1回シンポジウム 「専門教育から見た教養教育の現状と課題」</p> <p>25日 学術フロンティア超表象デジタル化研究ユニット デジタル・コンテンツ・システムの名称「ハイジ」に決定</p> <p>25・26日 学術フロンティア「現代における危機的問題」研究グループ学会発表英国ダラム大学 “Telling the Story of Male Madness: The Nervous Breakdown of Victorian Labouring Man” “Body Image and Therapeutic Choice: Evidence from Modern Japan”</p> <p>29日 開かれゆくキャンパス 第5回「慶應義塾一貫教育の冒険 平家物語群読会」</p>
2	<p>8日 アカデミック・スキルズ「プレゼンテーション・コンペティション」</p> <p>10日 学術フロンティア「バリアフリー・キャンパス構築研究グループ」主催研究会(東京大学先端科学技術研究センターにて)</p>
3	<p>1日 オーストラリア教育研究機関(University of Sydney・University of New South Wales)訪問(3月4日まで)</p> <p>15日 学術フロンティア「温故知新」型教育研究グループ第2回シンポジウム「法の中の教養/教養の中の法」</p> <p>16日 センター運営委員会</p> <p>17日 学術フロンティア「知との遭遇」研究グループディスカッション・セミナー 「導入教育の役割とコア・カリキュラムの構築 - 1年次教育をどうとらえるか」</p> <p>31日 教養研究センター選書3『ドラキュラ』からブンガク 血のみならず口のすべて』発行</p>

# 終わりに

2005 年度の活動を振り返って

教養研究センター事務長 吉川 智江

教養研究センターが発足して5年目に当たる2005年度は、これまでに培われたさまざまな成果を基に、センターの研究・教育活動がさらに深化、拡大した1年であった。

センターの研究活動の中核をなす「基盤研究」は、そもそも文部科学省の委託研究「教養教育グランド・デザイン」に端を発し、その後の2年間は、主に日吉に設置された学部共通総合教育科目の調査と分析を行った。これを継いで、本年度からの2年間はカリキュラム研究を掲げて、大学教育の問題点を大局的に検証すると同時に、慶應義塾に視座を置き、カリキュラムの問題点を探るといふ2つの方向から光を当てて、大学教育の実態および課題を浮き彫りにしている。いずれの課題においても、義塾内外から多彩な講演者を迎えて、熱心な討論が繰り広げられた。研究メンバーによる研究会もこれに並行して開催された。講演会の内容は、「CLA アーカイブズ」として冊子やWEB上で発信され、研究の終了時には、2年間の研究成果が報告書としてまとめられる予定である。「基盤研究」では、他に身体知研究プロジェクトのメンバーが、2006年度秋学期の実験授業開始を目指して、実践と検証を重ねた。

「特定研究」に位置する学術フロンティア「表象文化に関する融合研究」プロジェクトは、2004年度をもって当初予定された5年の研究期間を終了した。2005年度からはこれまでの研究成果を精査し、「超表象デジタル研究」として3年間の継続申請が認められ、現在、4つのプロジェクトが展開されている。報告書の作成から申請書の提出に至る支援業務が、年度を跨ぐ事務局の仕事であった。さらに、「一般研究」では、7つのプロジェクトが、来住舎内の施設を活用して、研究を進めた。

一方、センターの研究・企画ボード、各セクション、各委員会が推進する事業や活動においても、交流や連携、情報の発信や共有などで、新たな進展がみられた。調査・研究セクションでは、教員による授業公開のプロジェクトを立ち上げた。また、大学教育調査の一環としては、国内、韓国、オーストラリアの複数の大学を訪問し、海外からも、多くの研究者や有識者が来訪し

た。FD セミナーでは、ケルン大学ライティングセンター所長ヘルガ・エッセルボルン博士の講演「構造的教授法」に多数の教員が耳を傾けた。日本におけるドイツ年に因んでは、2つのセミナーが開催された。ソウル国立大学との間ではWEB会議を開催し、学生、研究者が互いに大学教育について意見を交わした。

交流・連携セクションでは、「開かれゆくキャンパス」の活動において、地域社会との連携に加えて、今年度は、一貫教育校と連携して、生徒・大学生約100名による“平家物語群読会”を開催した。一糸乱れぬ生徒たちの澄みきった声が印象的だったこの群読会は、感動教育、身体知、協働を内包した教育活動の新たな試みと言える。また、極東証券寄附講座「スタディ・スキルズ」を修了した学生たちが、「アカデミック・スキルズ」の現受講生とともに、自ら企画した大学教育を考える学生フォーラムも、日吉では初めての試みであった。

新しい教養教育の実践へと繋がる、学部横断的な授業の開発・改善を資金的に支援する「新しい教養授業の支援」公募事業では、昨年度に続き、日吉予算管理部門内調整費を得て、効果が期待される16件の事業を採択した。12月には、研究成果の共有を目的に、成果発表会を開催した。同じ12月には、日吉キャンパスで初めてとなる研究成果発表会 Hiyoshi Research Portfolio 2005 が開催され、センターは、研究・教育活動の成果を展示したほか、2つのシンポジウムを主催した。

こうして振り返ってみると、事務局としては、会議やセミナー、委員会の開催支援、広報・発信の補助、各種事業の準備など、センターの研究・教育活動の広がりや深まりとともに、この1年も慌しく駆け抜けた感がある。

5年という月日を経て大樹となった教養研究センターが、これからも長く緑の葉を茂らせていくためには、時には遠く離れて眺めたり、葉や枝を整理することも必要であろう。しっかりと地に根をはり、幹の太い大樹となるために、センターが義塾の内外に果たすべき役割を常に見据えながら、事務局として今度も尽力していきたいと考えている。

---

慶應義塾大学教養研究センター  
2005年度 活動報告書

---

2006年7月31日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL.045-563-1111(代表)

Email lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株) 太平印刷社

---

©2006 Keio Research Center for the Liberal Arts  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。